

下府廃寺跡

—平成元年度～平成4年度市内遺跡発掘調査概報—

平成5年3月

浜田市教育委員会

序

平成元年度に始まった下府廃寺跡の発掘調査も本年度をもって終了し、ここに4年次に及ぶ発掘調査の概報書を発刊することができました。

下府廃寺跡は古くからその存在が知られ、昭和12年には国指定史跡となるなど、今日まで大切に保存されてまいりました。この度の調査により金堂跡と塔跡が発見され、また、その創建は白鳳時代にまで遡ることが明らかとなり、あらためて浜田市の歴史と文化の深さを再認識したところであります。本市はこの他にも石見國分寺跡・同國分尼寺跡、そして未だその所在地は明らかではありませんが、石見國府が所在しており、まさに古代文化の宝庫であります。この貴重な文化遺産を健全な姿で後世に伝えることが私たちの責務であり、また、これらを通じて祖先の薪みを学ぶことは、伝統的な文化を再認識するとともに「ふるさと浜田」を再発見し、個性ある浜田を築いていくことができるものと考えております。

奇しくも本年、島根県立国際短期大学が開学いたしますが、現代の文化の拠点である大学を中心とした新たな文化創造と県内屈指の古代寺院である下府廃寺跡をはじめとする文化財の解明などにより、文化の香り豊かな浜田を築いていくことができるものと信じております。

本書にまとめられた資料が広く活用され、文化財保護思想の普及と歴史研究に役立つことを願うしたいであります。

おわりに、調査にあたってご指導いただきました山本清、松下正司、田中義昭、桑原韶一の諸先生をはじめ、文化庁、島根県教育委員会の諸先生方に厚く感謝申し上げます。また、ご協力いただきました地元関係各位に対し心から感謝を申し上げる次第であります。

平成5年3月

浜田市教育委員会

教育長 古原忠雄

例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成元年度～平成4年度にかけて国庫・県費の補助金を得て実施した市内遺跡発掘調査事業の概要報告である。
2. 本調査は市内遺跡発掘調査事業として下府廃寺跡の調査及び片山古墳の測量調査を実施している。
3. 調査を実施するにあたって、地権者の川崎武美、川崎吉郎、川本博文、小寺武三、小寺学、佐々木定美、佐々木謙、慈地守弘、半場徳四郎、吉本悦子各氏並びに紙屋幸盛、佐々木節夫、村瀧敏雄の各氏にご協力いただいた。また、片山古墳の測量については三浦文雄氏、基準点設置にあたっては長橋利明氏にご協力いただいた。この他、小寺義一氏をはじめ地元下府地区の方々にご協力いただいている。
4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 浜田市教育委員会 教育長 半田 淨（平成元年度）

教育長 古原忠雄（平成元年度～平成4年度）

調査指導 山本 清（鳥根大学名誉教授 平成2年度～平成4年度）

松下正司（比治山女子短期大学教授 平成2年度～平成4年度）

田中義昭（鳥根大学法文学部教授 平成2年度）

桑原韶一（鳥根県文化財保護指導委員 平成2年度～平成4年度）

鳥根県教育委員会文化課

調査担当者 桑原韶一（鳥根県文化財保護指導委員 平成元年度）

調査員 半場幸雄（鳥根県文化財保護指導委員 平成元年度）

原 裕司（浜田市教育委員会 平成元年度～平成4年度）

遺物整理員 榎木庸子（臨時職員 平成元年度）

事務局 浜田市教育委員会社会教育課（平成元年度～平成3年度）

社会教育課長 飯泉清次（平成元年度～平成2年度）

吉田 澄（平成3年度）

社会教育係長 宅間雅照（平成元年度～平成3年度）

主任主事 山本 博（平成2年度～平成3年度）

主事 斗光秀基（平成元年度）

浜田市教育委員会生涯学習課（平成4年度）

生涯学習課長 吉田 澄

文化振興係長 浅田 勇

主事補 佐々木淳也

5. 調査にあたっては井上和人、松村恵司、西田健彦、増満徹(文化庁記念物課)、上原真人(奈良国立文化財研究所)、渡辺貞幸(鳥根大学)、足立克己、熱田貴保、内田律雄、勝部昭、川原和人、西尾克己、林健亮、広江耕史、松本岩雄、宮沢明久、柳浦俊一(鳥根県教育委員会)、平野芳英(鳥根県立風土記の丘資料館)、鈴木久男(京都市埋蔵文化財研究所)、柏木秋生(萩市教育委員会)、宍道年弘(斐川町教育委員会)、遠藤浩巳(大田市教育委員会)、宮本徳昭(江津市教育委員会)、吉川正(鳥根県文化財保護指導委員)、大谷晃二(浜田高校教諭)、白井克也(東京大学学生)、浜田高校歴史部、浜田ろう学校、上府小学校の各氏、各機関にご協力・ご助言いただいた。
6. 片山古墳の石室実測については、大谷晃二(浜田高校教諭)、川崎陽子、佐々木幸美、中田貴子、藤本恵美、徳田裕、茅島智子、田原千恵、横岡泉(以上、浜田高校歴史部)、山田憲二(浜田高校生)が行った。
7. 造物・図面の整理にあたっては大島一二三、渋谷朋子、中田貴子、中田洋子、藤本潤子、余村広美の各氏にご協力いただいた。
8. 地形測量は石見測量設計株式会社に基準点設置を委託し、主要部分を浜田市教育委員会で測量した。それらの成果をワールド航測コンサルタント株式会社に委託して、昭和54年10月撮影の航空写真と調整を行い地形図を作図した。
9. 本書に使用した方位は国土地理院による第III座標系を基準としたもので、真北とは0°01'35"西へ振れている。
10. 本書の挿図第1図は国土地理院発行の50,000分の1地形図を使用した。
11. 平成元年度及び平成3年度調査については既に調査概報を刊行しているが、本書をもって正式な報告としたい。
12. 本書の編集は原裕司が行った。
13. 執筆は原裕司が行った。なお、「付 片山古墳測量調査報告」については大谷晃二が行った。

目 次

序

例 言

I.はじめに	1
II.位置と歴史的環境	2
III.調査の概要	5
1.既往の調査	5
2.調査区の概要	7
3.遺跡の状況と寺域の整地	9
IV.遺構	11
1.金堂跡	11
2.塔跡	13
3.その他の造構	17
V.遺物	19
1.瓦類	19
2.土器	32
VI.まとめ	36
付.片山古墳測量調査報告	43

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	2
第2図 石見国分寺塔跡	3
第3図 石見国分寺瓦窯跡と出土軒平瓦	4
第4図 下府庵寺跡周辺図	5
第5図 調査区配置図	6
第6図 調査区土層図(1)	8
第7図 調査区土層図(2)	10
第8図 第10-1調査区(金堂北東隅)実測図	11
第9図 下府庵寺跡伽藍配置図	12

第10図	第7調査区(塔北西隅)・第13-1調査区(塔東縁中央)実測図	14
第11図	第3-2調査区(段状造構)実測図	16
第12図	第14-1・2調査区実測図	17
第13図	第6-1調査区(小鍛冶跡)実測図	18
第14図	軒丸瓦実測図(1)	20
第15図	軒丸瓦実測図(2)	21
第16図	軒平瓦実測図	23
第17図	軒瓦の型式別出土状況	25
第18図	丸瓦実測図	27
第19図	平瓦実測図	28
第20図	平瓦調整拓影	29
第21図	道具瓦実測図	30
第22図	土器実測図(1)	33
第23図	土器実測図(2)	34
第24図	土器実測図(3)	35
第25図	寺院建立時の地形想定図	37
第26図	下府庵寺跡の伽藍配置と寺域想定図	38
第27図	片山古墳地形測量図	43
第28図	片山古墳石室実測図	44
第29図	石室壁面図	45

図版目次

図版1	下府庵寺跡近景	図版9	軒丸瓦
図版2	作業風景	図版10	軒平瓦
図版3	塔跡北西隅(中央 碕石抜取り穴)	図版11	平瓦・丸瓦
図版4	塔跡東縁中央(左 階段)	図版12	瓦道具
図版5	金堂跡北東隅	図版13	土器
図版6	金堂跡版築土	図版14	片山古墳石室(奥壁を望む)
図版7	段状造構	図版15	片山古墳石室(羨門を望む)
図版8	柱穴群		

I. はじめに

下府廃寺跡は島根県浜田市下府町に位置し、那賀郡金城町を源とする二級河川下府川の下流、沖積平野の北側丘陵部に立地する。周辺からは瓦片が採集され、伽藍としては早くから塔跡が知られていた。昭和12年6月15日に「下府廃寺塔跡」として国の史跡指定がなされているが、その指定範囲は塔心礎部分の72m²であり、また、今日に至るまで調査が実施されておらず、詳細は明らかではなかった。

昭和48年に浜田市告示11号によって第2種住居専用地域として用途地域が指定され、昭和57年には塔跡の西側約40mの位置に住宅が建ち並び、塔跡付近に今回新たな住宅建設の計画が持ち上がるに至った。さらに、広島と結ぶ中国横断自動車道、国道9号線バイパスと交通網の整備が進み開発条件が整いつつあり、すでに、大規模な宅地開発やリゾート開発計画が提示されるなど、急速に開発の波が押しよせている。

下府川下流の沖積平野は国府、国分寺、国分尼寺が所在する古代石見国の中心地であるにもかかわらず、石見国府が未だ明らかになっていないなど埋蔵文化財の把握が不十分であり、その対応は急務となっている。

そのため、浜田市教育委員会では国庫補助金及び県補助金を受けて市内遺跡発掘調査事業を実施することとなった。調査は差し迫った開発計画を抱える下府廃寺跡を対象とし、その残存状況及び寺域確認を目的とした3ヶ年計画を立て、平成元年度より発掘調査に着手したが、目的を達するまでには至らなかったことから文化庁の指導を受け、さらに1年間延長して平成4年度まで調査を実施した。

この4年次に及ぶ調査により、遺跡の広がりと残存状況の確認ができたとともに、一応の下府廃寺跡の概要も確認することができた。各年度の調査状況は下記のとおりである。

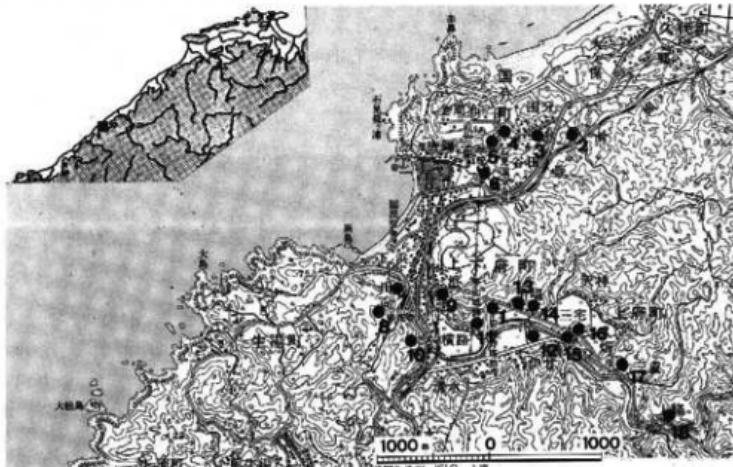
平成元年度の調査は、平成2年1月18日～3月5日の期間に6調査区134m²を、調査費1,520,550円で実施し、段状造構、小鍛冶跡を確認した。平成2年度の調査は、平成2年8月1日～平成3年3月13日の期間に3調査区81m²を、調査費2,000,172円で実施し、塔跡の規模を確認するとともにその西側に基壇を確認した。平成3年度の調査は、平成3年8月4日～平成4年3月25日の期間に5調査区129m²を、調査費3,520,391円で実施し、塔跡西側から金堂跡と柱穴群を確認した。また、併せて片山古墳の測量調査も実施している。平成4年度の調査は、平成4年9月7日～平成4年12月3日の期間に11調査区79m²を、調査費2,502,366円で実施し、寺域の確認はできなかったものの残存状況及び寺域内の整地状況を確認することができた。

II. 位置と歴史的環境

下府廃寺跡は、鳥根県浜田市下府町632番地4外に所在し、古代石見国と呼ばれた鳥根県西部のほぼ中央に位置する。石見国は中国山地から派生する山々が海までせまり、大小の河川は急峻な山々を縫うように北西方向に流れて日本海に注いでいる。その途中でわずかばかりの河岸段丘を形成させるとともに河口には沖積平野が形成されている。下府廃寺跡の所在する下府川下流域も河口から約3.3km、幅約500mの蛇行した下府平野が広がっている。

下府廃寺跡は下府平野の北側丘陵裾部に形成された微高地に立地する。微高地の標高は約14mで南側に緩やかに傾斜し、標高約5mの水田に至る。比高差は約9mである。廃寺跡の北側丘陵は北東から南西へ延び、尾根の先端部分が三方へ分岐して広がって独立丘陵を呈しており「笹山」と呼ばれている。標高は66.5m、微高地との比高差約53mの急峻な地形を呈している。そのため、微高地は北側に丘陵、西側に笹山があり二方向が囲まれた格好となっている。現在、北側の丘陵と笹山の間を市道下府・上府線が切り通している。

この下府川下流域の沖積平野は国府や国分寺、国分尼寺が所在する石見国を中心地であるが、遺跡確認数が少なく、研究は大きく立ち遅れている。国府についても幾つか候補地



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図 ($S = 1/50,000$)

- | | | | |
|-------------|---------------|------------|----------|
| 1. 下府廃寺跡 | 6. 滝山ろう学校敷地古墳 | 11. 笹山城跡 | 16. 上府遺跡 |
| 2. 余占田窯跡 | 7. 川向遺跡 | 12. 古市遺跡 | 17. 新延遺跡 |
| 3. 石見国分尼寺跡 | 8. 多陀寺遺跡 | 13. 半場口古墳群 | 18. 上条遺跡 |
| 4. 石見国分寺跡 | 9. 伊甘神社脇遺跡 | 14. 片山古墳 | |
| 5. 石見国分寺瓦窯跡 | 10. 中ノ古墳 | 15. 宮宅山遺跡 | |

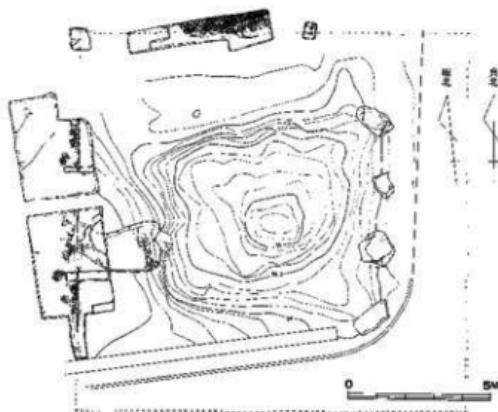
が上げられ、昭和52年度～昭和54年度にかけて下府町横道地区、伊甘神社脇遺跡⁽¹⁾、上府遺跡⁽²⁾で試掘調査が実施されたが所在地を確認するまでには至っていない。以下、主な遺跡について触れておく（番号は図1の番号と同じ）。なお、現在までのところ、この下流域で旧石器・縄文時代の遺跡は知られていない。

2. 奈古田窯跡 国分寺跡から東側730m離れた同丘陵斜面に位置する須恵器窯である。私道造成中に発見されたもので、窯の中心部分は烟によって破壊されているものと考えられる。時期は7世紀～8世紀と考えられている。

3. 石見国分尼寺跡 国分寺跡から東側約350m離れた同丘陵上に位置し、現在は国分寺境内となっている。地名に「比丘尼所」「尼所」が残されている。調査が実施されておらず実態は明らかではないが、石見国分寺と同文の軒瓦や白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。

4. 石見国分寺跡 日本海を望む標高約50mの台地状の丘陵に立地し、現在は金蔵寺境内となっている。昭和60年の現状変更を契機に3回に及ぶ調査を実施しているが、塔跡以外の伽藍については明らかではない。塔跡（図2）は真北を軸とした1辺15m前後の基壇が想定され、その周囲には地覆石にあたる埴列が認められる。埴石は原位置をほぼ保ち、初重は1辺約8m程度と考えられる。なお、白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。

5. 石見国分寺瓦窯跡 国分寺塔跡から約100m南西側に位置する。窯構造は半地下式の無形状平窯で、焼成室より60cm燃焼室を下げ、その間にU字形に壠くはめた段をもつ。

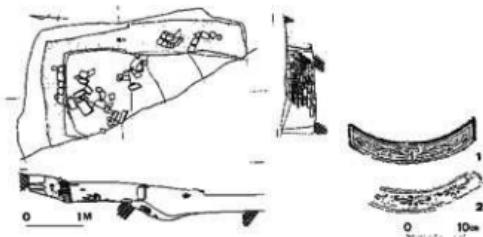


第2図 石見国分寺塔跡 (S=1/200)

窯の構築材として均整唐草文軒平瓦（図3-1）を使用し、蓮華文軒平瓦（図3-2）を焼成していた。現在、県指定史跡として保存されている。

7. 川向遺跡 下府川河口に近い自然堤防上に立地する複合遺跡である。広範囲にわたって弥生時代中期～中世の遺物が出土する。

9. 伊甘神社脇遺跡 式内社である伊甘神社に所在する複合遺跡である。昭和53年に調査が



第3図 石見国分寺瓦窯跡と出土軒平瓦

実施され、古墳時代中期の祭祀土壇や柱穴群が確認されている。遺物は弥生時代中期～中世のもので、瓦も含まれていた。

12. 古市遺跡 下府平野の南側の一角を占める遺跡で、微高地上に立地する。平成3年に一部調査が実施され、底ないし縁を付けた

掘立柱建物、柱穴群、井戸、溝が確認されている。遺物は弥生時代前期～中世のものが認められ、瓦や綠釉陶器も含まれているが、主体は12世紀～13世紀と考えられる。

13. 半場口古墳群 2基の古墳が知られ、何れも墳丘は不明である。主体部は1号墳が箱式石棺、2号墳が横穴式石室である。なお、2号墳は現在畠地となっており、石室の奥壁にあたる石が1枚残されている。

18. 上条遺跡¹⁰ 下府平野の最奥に位置する遺跡である。大正末に丘陵中腹より偶然2個体分の銅鐸が発見された。銅鐸はほぼ完形のもの（推定総高28cm）と上部の残欠であり、ともに扁平紐式の袈裟摩文銅鐸である。

註

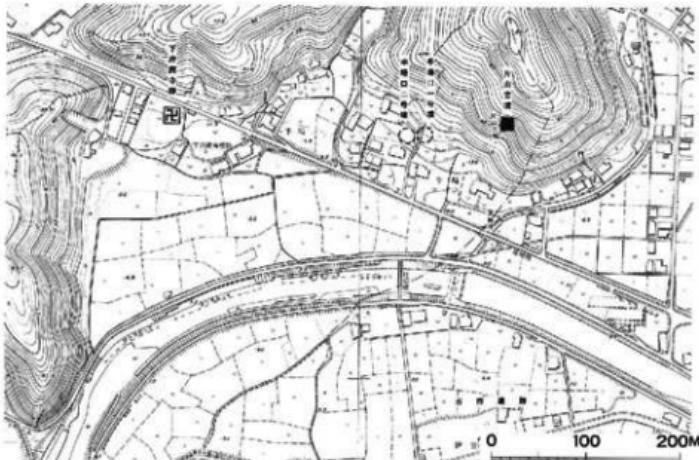
- (1)鳥根県教育委員会「石見国府推定地調査報告Ⅰ」昭和53年
- (2)鳥根県教育委員会「石見国府推定地調査報告Ⅱ」昭和54年
- (3)鳥根県教育委員会「石見国府推定地調査報告Ⅲ」昭和55年
- (4)川原和人「石見の須恵器窯跡」「きんいん古代史の周辺」(下)昭和55年
- (5)国府町文化財審議会「国府町の文化財」昭和38年
- (6)浜田市教育委員会「石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報」平成元年
- (7)内田律雄「石見国分寺瓦窯跡」「鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ」昭和61年
- (8)前掲註2
- (9)浜田市教育委員会「古市遺跡発掘調査概報」平成4年
- (10)直良信夫「石見上府村発見銅鐸の出土状態」「考古学雑誌22-2」昭和7年

III. 調査の概要

1. 既往の調査

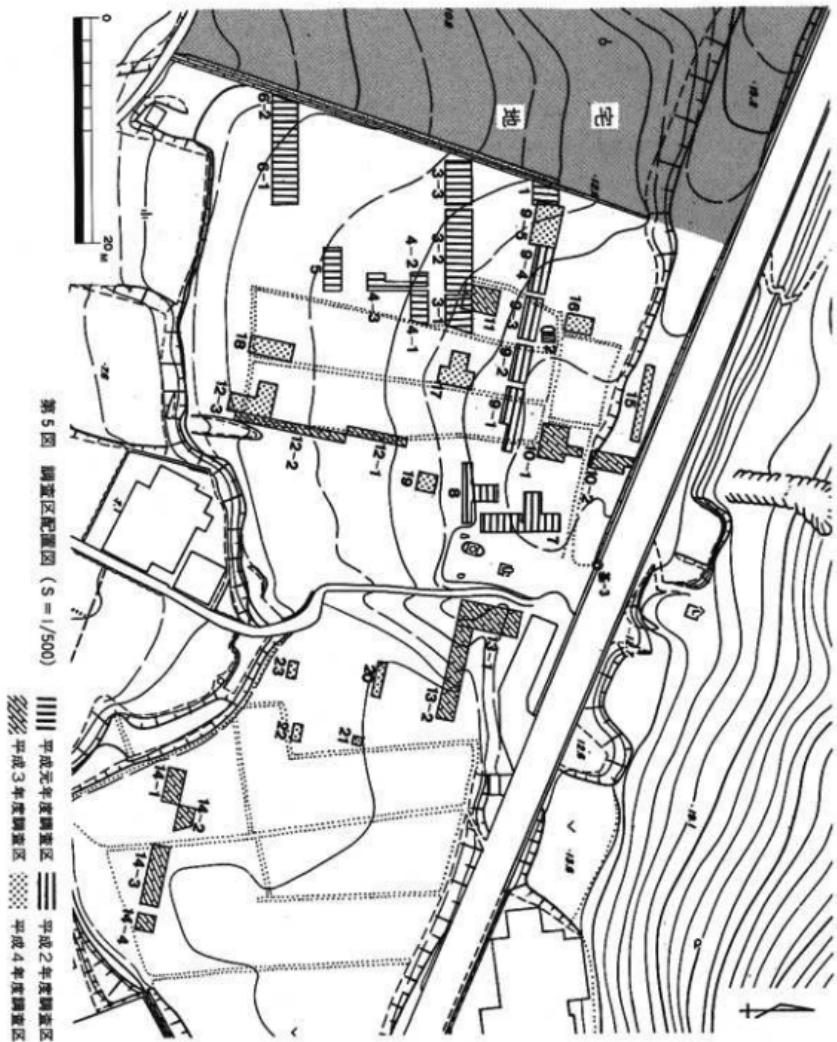
下府廃寺跡の存在は古くから知られており、塔心礎の横には寛延4年（1751）銘の刻文のある宝篋印塔が建てられている。その刻文によれば下府廃寺跡を石見国分尼寺の跡とし、その後、小堂の泰林寺が再興されたとしている。⁽¹⁾ 大正14年、野津左馬之助氏は下府廃寺跡について、塔心礎から二町の位置に字中門、さらに西南四町に大門の地名があることから広大な寺院であったとしている。しかし、下府廃寺跡を国分尼寺跡に比定することには否定的で、他の二ヶ所を参考地として上げている。⁽²⁾ 昭和11年9月、塔跡北側に国鉄広島浜田線（現在市道下府上府線）の工事が実施されることになり、下府村長より「泰林寺」の名称で史跡指定申請が行われ、昭和12年6月15日に塔心礎部分のみではあるが「下府廃寺塔跡」として国指定史跡となり、今日まで保存されるに至った。⁽³⁾ 現地調査については昭和55年に島根県教育委員会の石見国府推定地の調査に併せて地形略測図が作成されたのみで、今回の調査に至るまで未調査のままであった。

出土遺物については、昭和43年に山本清氏が触れられており、軒丸瓦3種、軒平瓦1種とし、奈良時代前期から後期にわたるものとしている。軒丸瓦には鳥取県の岩井廃寺・大原廃寺の出土瓦と共にした技法のものと、蓮弁中に線刻した石見国分寺跡・同国分尼寺跡出土瓦と似た様相のものがあると指摘している。また、前島己基氏は軒丸瓦I・II類を白



第4図 下府廃寺跡周辺図 ($S = 1/6,000$)

第5図 調査区配置図 (S = 1/500)



鳳末期から奈良期前葉に位置付け、軒丸瓦V類については時期がかなり下るものと考えられてい。^註

下府廃寺跡は、これまで現地踏査あるいは採集された軒瓦から検討されてきたが、遺跡の具体的な内容とともに、遺跡の保護上からも本格的な調査の必要性が痛感されていた。

註

- (1)佐々木徳三郎「下府廃寺塔跡の宝塔碑文について」『亀山』第8号 昭和56年
- (2)野津左馬之助『島根県史』五 大正14年
- (3)島根県教育委員会『石見国府推定地調査報告III』昭和55年
- (4)山本清「第六節 仏教」『新修島根県史』通史篇一 昭和43年
- (5)前島己基「山陰における初期造寺活動の一侧面」『山陰考古学の諸問題』昭和61年

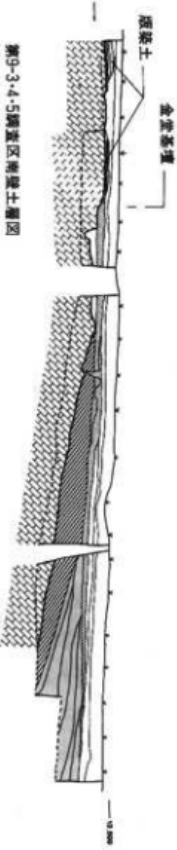
2. 調査区の概要(図5)

調査区は、真北を基準とし、平成元年度に第1～6調査区を畠地の関係から塔跡西側に設定している。第3、4調査区からは段状造構、第5、6調査区からは小銀治跡を確認したものの下府廃寺跡に直接関わる造構は確認できなかった。しかし、平成2年度の調査では第7、8調査区から塔基壇が確認でき、伽藍の主軸が真北より東へ12度振っていることが明らかとなった。そのため、調査区の基準を真北から伽藍の主軸に変更し、第9調査区以降を設定した。その第9調査区で基壇を確認することができた。

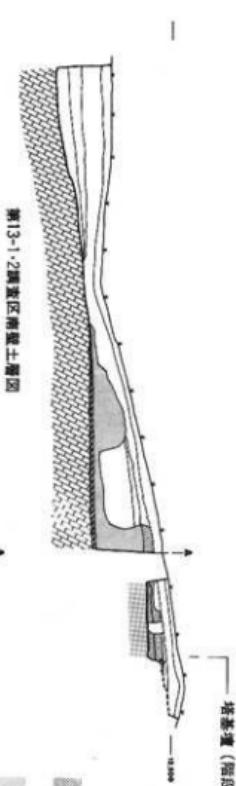
平成3年度の調査では、第9調査区で確認した基壇の性格を明らかにするため第10、11調査区を設定し、金堂基壇であることを確認した。また、塔基壇東縁の残存状況を確認するため第13調査区を設定し、基壇と階段を確認することができた。中門の確認については第12調査区を設定したが、後世の削平を受けており確認できなかった。しかし、第12-2調査区南側で表上面より1.5m下から瓦溜りを確認できた。寺域については1町四方を想定し、第14調査区を設定したが、第14-1・2調査区で柱穴群を確認したものの、第14-3・4調査区では後世の削平を受けていた。

平成4年度の調査では、寺域を半町四方と想定して第9-5、18、12-3、20、23調査区を設定したが確認できず、逆に寺域の整地がさらに広く行われていることを確認した。また、第16、17調査区を設定して金堂基壇の外装と南縁の確認、第19調査区では塔基壇の残存状況、第15調査区では講堂の確認を行ったが目的を達することはできなかった。

第9-3-4-5調查區南壁土層圖



第13-1-2調查區南壁土層圖



遺物包含層
整地土
旧表土
地山

第13-2調查區西壁土層圖
(S = 1/100)



第10-2調查區西壁土層圖



第6圖 調查區土壤圖(1)

3. 遺跡の状況と寺域の整地（図6、7）

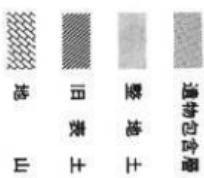
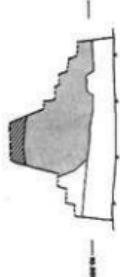
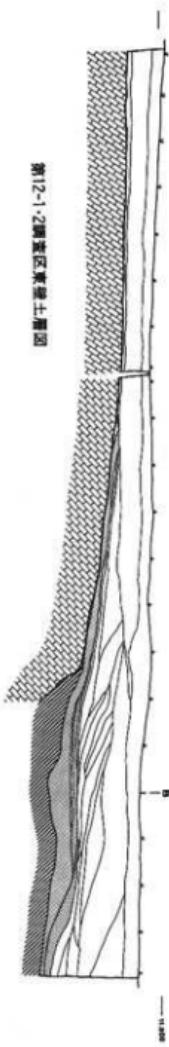
今回の調査により計23ヶ所の調査区を設けたが、小さな調査区で展開させた上、遺跡全体を覆うような設定を行っておらず、遺跡全体の状況把握は困難である。しかし、「下府庵寺跡の残存状況と寺域の整地についての検討資料をある程度得ることができた。

残存状況については、完全に削平されていたのが第12-1と2の北側、13-2東側、14-3・4調査区で、下府庵寺庵絶以後の遺構が残存していたのは第3、4調査区、第5、6調査区、第14-1・2調査区、第19調査区であった。下府庵寺跡については金堂跡が第2、9、10-1、11、16、17調査区、塔跡が第7、8、13-1調査区で確認できているが、金堂については第11、17調査区、塔跡については第8調査区で辛うじて確認できる状況であり、金堂跡、塔跡の南縁の検出ができず、伽藍の南側ほど削平を大きく受けていることが明らかとなった。

寺域の整地については、第3-3、8、9-4・5、18、19、12-2・3、13-1・2、20調査区で弥生時代から古墳時代の遺物を含む黒色土が確認され、その黒色土直上に遺物の全く含まない黄褐色系上や、黄褐色系上と暗褐色系上が互層状に堆積する整地土が確認されている。さらにその上に遺物包含層が堆積している。この状況から黒色土が寺院建立時の旧表土と考えられる。

この旧表土の堆積状況は、第3-3、9-5調査区では西側に傾斜し、現在宅地化されている部分の旧地形を昭和54年10月撮影の航空写真で作成した地形図（図5、25、26）でみると谷が図化されており調査状況と符合する。ただし、旧表土の傾斜からみて図化された谷よりもさらに深い谷底であったことが想定される。しかし、寺域の整地土上面の傾斜でみると図化された谷の標高と大きな差はないものと思われ、谷全体をある程度整地したものと想像される。

第18、12-2・3調査区では南東側に旧表土が傾斜し、第12-2・3調査区では整地土も南東側に傾斜している。第8調査区については東側、第13-1・2調査区では南側に旧表土が傾斜し、第14-1調査区では旧表土の確認はできなかったものの、地山が緩やかに西側に傾斜していることから、第18、12-2調査区と第14-1調査区の間に第13-1・2調査区まで入り込む谷を復元することができる。第20調査区では谷底と考えられる旧表土上面を標高9.1mで確認できた。第8調査区で確認した旧表土上面との比高差は3.4mである。この谷での寺域の整地土は第13-1・2、20、21、23調査区で確認でき、第20調査区の状況からみても谷全体を整地していたものと考えられる。ただし、第12-2・3調査区では整地を大きく行っていないことから谷全体の整地も緩やかに南側方向に傾斜していたものと想像される。



(S = 1/100)

0
5M

第7圖 調查区土層圖(2)

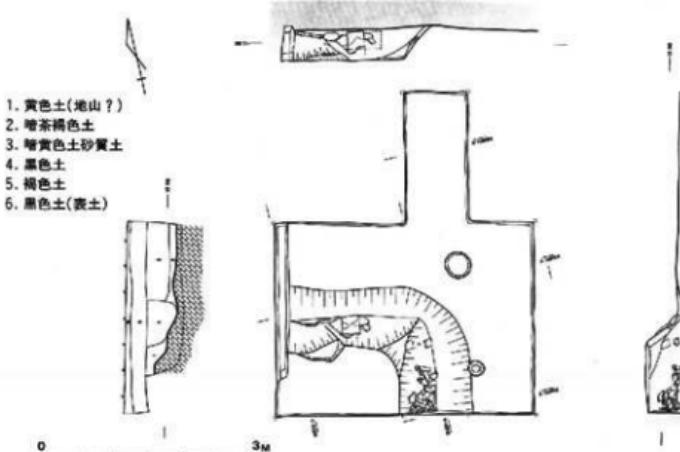
IV. 遺構

4年次に及ぶ調査で下府廃寺跡に関わる遺構を確認できたのは金堂跡と塔跡であり、他の伽藍については確認することができなかった。しかし、下府廃寺跡が法起寺式に近い伽藍配置を採用していること、伽藍中軸線が真北より東へ12度振っていることが明らかとなつた。また、下府廃寺跡廃絶以後の遺構として、古代から中世にかけての段状遺構や柱穴群、そして近世前半の小鍛冶跡を確認できた。以下、各遺構ごとに記述する。

1. 金堂跡（図8、9）

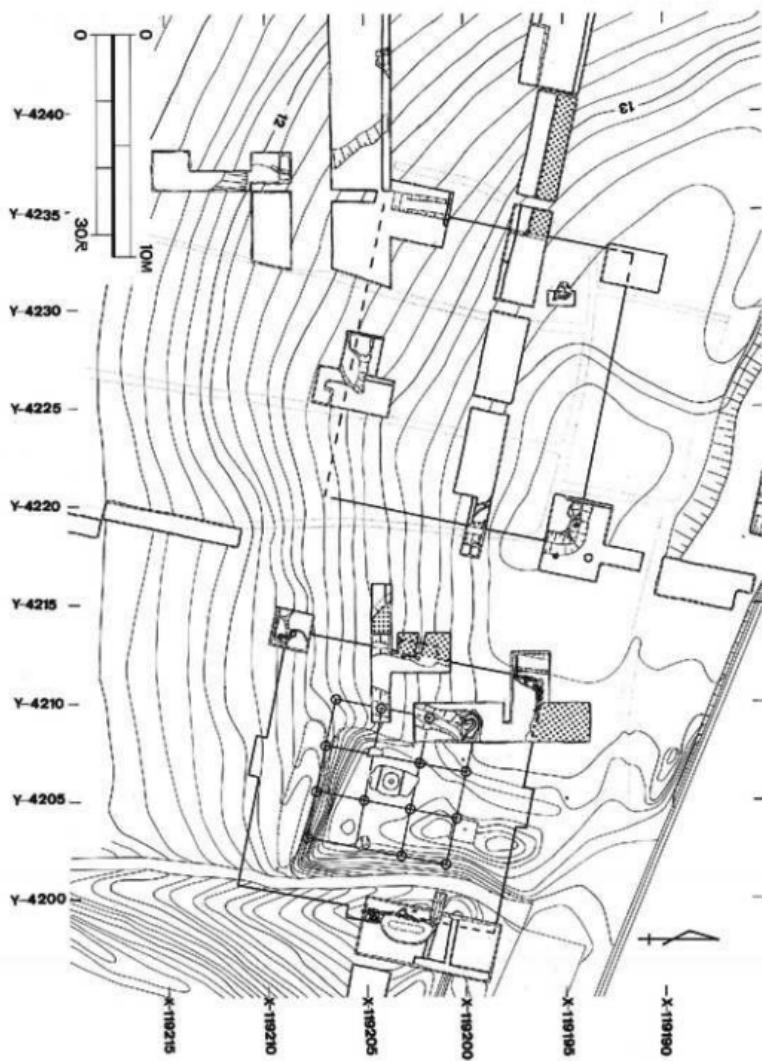
金堂跡は第2、9-1~3、10-1、11、16、17調査区において明らかにできたが、基壇の上部と南縁は削平されていた。基壇の規模は東西長15.22m、南北残存長11.96mで、基壇残存高は最も良好な第10-1調査区（基壇北東隅）で56cmを測る。基壇外装については明らかにすることはできなかった。

基壇の構築状況は、第10-1調査区では基壇基底部標高が12.82mで地山を30cm削り残していた。なお、版築土は認められなかった。第16調査区（基壇北西隅）では基壇基底部標高が12.72mで地山を4cm削り残し、黒色土と黄褐色土の築土を盛っている。第9-1調査区（基壇東縁中央）は基壇基底部標高が12.74mで地山をほぼ水平に整地し、その上に4cm程度の薄い黒色土層と6cm程度の黄褐色系土を互層状にして版築を行っている。また、



第8図 第10-1調査区（金堂北東隅）実測図 ($S = 1/80$)

第9回 下府東寺跡地盤配置図 (S = 1/250)



第9-3調査区（基壇西縁中央）においても基壇基底部標高が12.56mで地山を14cm削り残し、その上に4cm~10cm程度の黄褐色系土と黒色土を五層状にして版築を行っている。第11調査区（基壇南西隅付近）は基壇基底部標高が12.5mで、地山上面から黄褐色上の築土を盛っている。第17調査区については削平により基壇南縁の確認はできなかったが、南側に緩やかに傾斜する地山上面（標高12.64~12.5m）から黄褐色土の築土を確認している。ここで版築土についてまとめておくが、基壇中央を東西に確認した第9-1~3調査区で版築土を確認したもの、第2、10-1、16調査区の基壇北側では確認されず、基壇南側の第11、17調査区では削平が著しくて判断することはできなかった。基壇の構築を検討するには調査が不十分ではあるが、地山を若干南側に傾斜させつつもほぼ平坦に整地し、その後に部分的ないしは基壇中央から南側を中心に版築を用いながら築土を盛って築いたものと想定される。

基壇外装については、第10-1調査区の北縁で塙を確認している。塙は縦32cm、横28cm、厚さ3.5cmで、基壇基底部に3枚の塙が横に並び、その塙の上にもう一段（枚）塙がのっていたが、直立せずに傾斜する基壇確認面に貼付いていた。また、第9-3、16調査区でも同様に傾斜した基壇に人頭大の石が貼付いた状況で認められた。いずれにしても基壇外装の残存状況は悪く、明らかにすることはできなかった。なお、第9-1、10-1調査区では基壇縁に沿って幅40cm~70cm、深さ10cmの溝を確認している。他の調査区では認められなかつたが、現時点では基壇外装に伴う溝と考えておきたい。

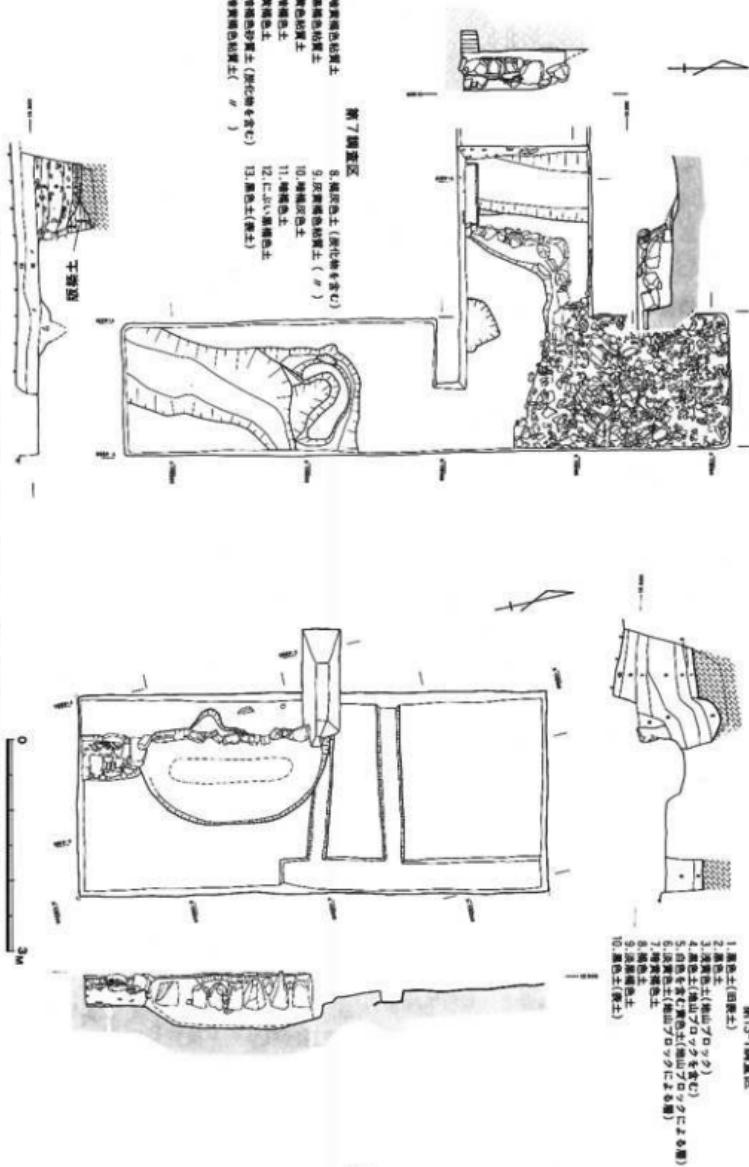
第10-1調査区では、基壇外装に伴う溝の外側に径42cm、深さ12cmと径26cm、深さ10cmの柱穴2を確認している。金堂跡に関係するものと思われるが、その性格は不明である。

基壇上面には礎石が1個残されていることから第2調査区を設定したが、原位置を保つておらず、第9-1~3調査区においても礎石抜取り穴などは確認できなかつた。そのため、金堂の建物規模や削平の程度について、明らかにすることはできなかつた。

2. 塔跡（図9、10）

塔跡は第7、8、13-1調査区において明らかにできたが、塔基壇南西隅（第19調査区）は後世の削平により確認できず、現地形からみても塔基壇南縁は残存していないものと考えられる。基壇の規模は1辺13.26mを測り、基壇残存高は第7調査区（基壇北西隅）で62cm、第13-1調査区（基壇東縁中央）で46cmを測る。なお、第13-1調査区では階段、第7調査区では塔北西隅にあたる側柱の礎石抜取り穴を確認している。

塔跡は、現在南北10m、東西8mの土壇状に後世の削平を受けており、特に南側については約1mに及ぶ段差がついている。土壇上には心礎と四天柱、側柱の礎石が各1個残さ



第10図 第7調査区(塔北西隣)・第13-1調査区(塔東隣中央)実測図 (S=1/80)

れ、そのうち心礎と四天柱の礎石は原位置を保っているものの、側柱の礎石は削平により若干動いている。心礎は南北長2.51m、東西長1.38mで、その上面は仰藍中軸線に直交するように南北側を削り、南北長1.29m、高さ2cmの方形の柱座を設けている。柱座中央には直径86cm、深さ6cmの円形の穴をうがち、さらにその中央に直径21cm、深さ12cmの舍利孔を設けている。四天柱、側柱の礎石はいずれも上面を平坦にしている以外は加工が施されていない。心礎と四天柱の礎石上面の標高は13.354m±2.1cmではほぼ揃っている。第7調査区で確認した塔北西隅にあたる側柱の礎石抜取り穴は、南東側半分を石州瓦を含む溝跡によって切られているが、周囲からは石片が多数出土している。

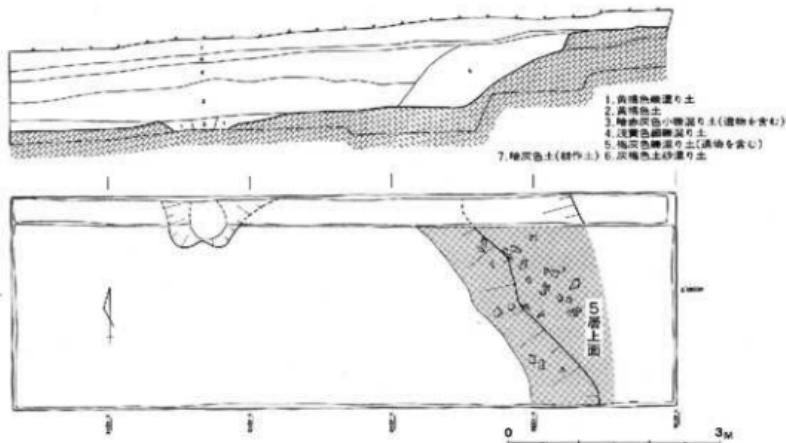
塔初重平面については、現存する心礎と四天柱、そして今回確認した側柱の礎石抜取り穴の位置関係から図上ではほぼ復元することができた。3間四方を等間隔に割り付けた場合であるが、1間が2.4m(8尺)、1辺は7.2m(24尺)と推定することができる。

基壇の構築状況については第7、8、13-1調査区でそれぞれ異なった在り方を示していた。以下、各調査区ごとに触ることにする。

第7調査区(基壇北西隅)では、基壇北縁部は瓦溜り上面で掘り下げを止め、基壇西縁部を完掘して調査を行った。その西縁での基壇基底部標高は12.58mで、基壇残存高は62cmであった。構築状況については地山を整地した後、基壇外装より一回り広い範囲から16cm地山を掘込み、その後に版築を行っている。版築土は7cm程度の黄褐色系土と黒色土を互層状にしたもので、5層確認でき、基壇基底部より20cm高くまで築いている。したがって、版築は36cmの厚さを有す。しかし、その上の築土は版築を行っておらず、黄褐色土を一括して盛り上げている。また、基壇外装は版築上面から築いており、人頭大から拳大の大きさの石と瓦片を構築材として使用している。そのなかには軒平瓦IIA類が認められた。なお、地覆石にあたるものは確認できなかった。

第8調査区(基壇西縁中央)は、一部完掘を行っているが、時間的制約から基壇縁の確認ができた段階で掘り下げを止めた。そのため、基壇外装状況と段階の確認を行っていない。基壇基底部標高は12.47mで、基壇残存高は41cmであった。構築状況は東側に傾斜するII表土を残したまま暗褐色土で整地し、その上に築土である明黄褐色土を一括して盛り上げて築いている。版築は認められなかった。

第13-1調査区(基壇東縁中央)では北東隅の確認はできなかったものの、基壇外装状況と段階の確認を行った。基壇基底部標高は12.01mで、基壇残存高は46cmである。なお、基壇縁を利用して、長径2.82m、短径1.18m、深さ32cmの半格円形の上塙を確認した。壁は垂直に切り落とし、底部は丸味を帯びた断面形を呈する。土壙内からは崩落した外装の石や瓦片、鬼瓦片、鷲尾片が出土している。この上塙の状況からみて寺院関係のも



第11図 第3-2調査区(段状造構)実測図($S=1/80$)

のとは考えられない。構築状況は南西側に傾斜する旧表土上に黄褐色土ブロックを含む黒色土と黄褐色系土によって整地と構築を行っており、版築は認められない。基壇外装は40~50cm×30~40cmの長方形の石を縦長に使用して築いている。裏込め土には軒平瓦III B類が含まれていた。階段については1段目しか残存しておらず、しかもその北側半分しか調査を行っていない。推定幅2m、奥行51cmを測り、基壇基底部から1段目までの比高差は34cmであった。階段の踏み面は扁平な石を主として使用し、一部瓦片も認められる。また、階段北側縁には登葛石にあたる石も認められた。階段の築土には比較的瓦片が含まれており、軒丸瓦I B類も含まれていた。階段の構築は、階段部分の基壇線ラインに外装の石が認められ、また第8調査区においても階段が想定される部分の基壇線ラインに外装の石が認められることから、基壇外装の構築後に付設されたものと考えられる。段階数については明らかではないが、心礎の標高からみて3段程度と考えられ、急な段階であったと想定される。

各調査区で確認できた塔基壇の構築状況は、基壇北西側を中心に地山を整地して、堀込み地業を行った後に版築を行っているが、他の基壇部分は地形が傾斜していることから旧表土上に整地土を置き、基壇には版築を用いずに築土を盛っている。また、基壇基底部は南東側に傾斜している。基壇外装は創建時の在り方は明らかではないが、第7調査区で構築材に軒平瓦II A類が使用され、第13-1調査区では裏込め土に軒平瓦III B類が認められること、外装の構築法が第7調査区と第13-1調査区では異なることから最低2回以上の改修が行われたものと考えられる。

3. その他の遺構

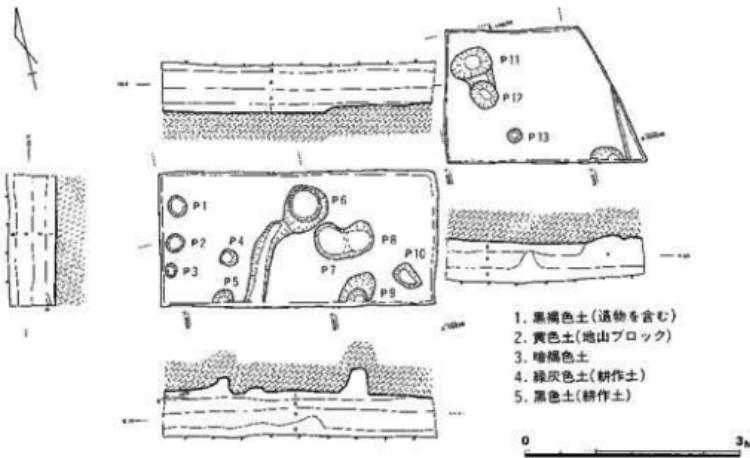
下府庵寺跡廃絶以後の遺構として、第3、4調査区から段状遺構、第14-1・2調査区から柱穴群、そして第5、6調査区では小鐵冶跡を確認している。

段状遺構（図11）

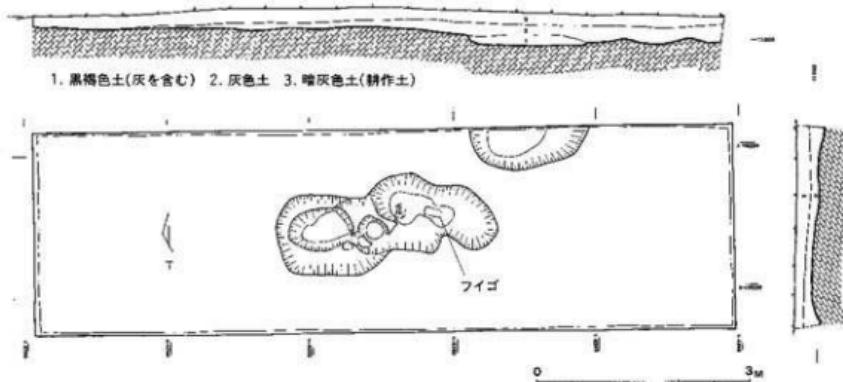
段状遺構は第3-2、4-2調査区で確認した。段状遺構は南北に延びているが、第9調査区では確認できていない。段状遺構は地山を掘削して比高差は1.4mの段を築き、その西側（第3-2・3）に東西11mの平坦部を設けている。平坦部からは柱穴1を確認しているほか、銅製品の破片（図23-19）も床面直上から出土している。標高は11.2mである。なお、第3-3調査区西端で段状遺構の整地上下から西側に傾斜する旧表土も確認している。この段状遺構には褐色灰色礫混り土（5層）が覆うように堆積しており、瓦片や鎧蓮弁を施す青磁碗（図23-6）が出土している。この遺構の性格について明らかにすることはできなかったが、その位置及び時期からみて寺院に関連するものとは考えられず、また、その下限については青磁碗の時期として考えておきたい。

柱穴群（図12）

柱穴群については、第14-1・2調査区で確認したが、第14-3・4調査区では標高10.5mで後世の削平を受けた地山を確認している。柱穴は緩やかに西側に傾斜する地山面



第12図 第14-1・2調査区実測図 ($S = 1/80$)



第13図 第6-1調査区（小鐵治跡）実測図（S=1/80）

(標高10.3~10.1m)で13穴確認している。柱穴の規模は径20~30cm、深さ20cm程度のものが7穴、径40cm、深さ40cm程度のものが5穴、そして径60cm、深さ30cmのものが1穴である。地山面上には黒褐色土(1層)の包含層が堆積し、須恵器甕(図22-27)、土師質土器(図23-3~5)、青磁碗(7)、白磁碗(9)が出土している。この包含層と柱穴の埋土とは分層できなかった。P1からは小皿(10)、台付皿(11)が出土している。なお、建物については調査面積が狭く復元には至らなかった。

小鐵治跡(図13)

小鐵治跡は第5、6調査区に広がるもので、第6-1調査区中央からは炉跡を確認している。第5調査区では調査区南西側から柱穴を確認しており、埋土から唐津焼碗(図23-13)をはじめ灰、炭、焼土が確認されている。また、第6-2調査区では柱穴1と唐津焼の碗、皿(10)、土師質土器の皿(15)、外耳土器(18)、石製錫(17)が出土している。炉跡は東西3.1m、南北1.15mの不整形な上塙で、その東側にフイゴが残されていた。土塙内には灰、炭、焼土が認められる。また、炉跡上面からは伊万里焼の小瓶(10)が出土している。

V. 遺 物

今回の調査により弥生時代から近世までの遺物が出土した。そのなかで最も量が多かったのは瓦類であり、この他には弥生土器、土師器、須恵器、朱塗の土師質土器、土師質土器、白磁、青磁、唐津焼、伊万里焼、石製鍋、また、鉄釘、銅製品、磨製石斧が出土している。このうち、磨製石斧、弥生土器、土師器、古墳時代の須恵器は旧表土である黒色土中より出土したものである。また、下府廃寺跡が建立され存続した時期の土器については、瓦溜りから瓦類と併に出土するものが多いが、小破片が主であり、図化できるものが少なかった。瓦類をはじめとするこれらの遺物については、未だ整理が完了しておらず、ここでは主な遺物を紹介しておきたい。

1. 瓦 類 (図14~21)

軒丸瓦 (図14、15)

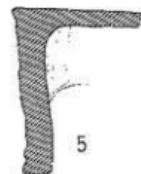
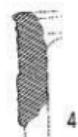
分類及びその表示方法は、外区の文様を大別の基準としてローマ数字で表示し、I類を圓線のみをめぐらすもの、II類を珠文をめぐらすもの、III類を珠文と鋸齒文をめぐらすもの、そしてIV類を鋸齒文をめぐらすものとした。それにつづいて型式を大文字アルファベットで表示した。小文字アルファベットについては同型式内の製作法及び形態の差を示すこととした。なお、同文異范については大文字アルファベットと小文字アルファベットの間にアラビア数字で示すものとしたが、今回の出土軒丸瓦では、同文異范は認められず表示を行っていない。

出土した軒丸瓦は117点であり12型式に分類した。型式別の出土状況と出土頻度は第17図に示している。

軒丸IA類 (図14-1) 凸形の中房に1+6の蓮子を配する單弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は細長く先端は若干尖り気味となり圓線に接する。また、中房、蓮弁、圓線の高さを揃えている。子葉の先端は稜線を伸ばす。焼成は硬質で青灰色を呈する。瓦当面には離れ砂が付着する。瓦当径17.8cm、内区径13.1cm、中房径4.7cm。

軒丸IB類(2) 凸形の中房に1+8の蓮子を配する單弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は細長く先端は丸くおさめている。軒丸IA類に比べ整美さが失われ、中房、圓線に対して蓮弁は低い。焼成は軟質で明黄褐色を呈する。瓦当面には離れ砂が付着する。瓦当径17.7cm、内区径12.8cm、中房径4.2cm。なお、範の崩れや焼成から軒丸IA類より若干後出する同一文様系譜として判断し1型式として設定した。

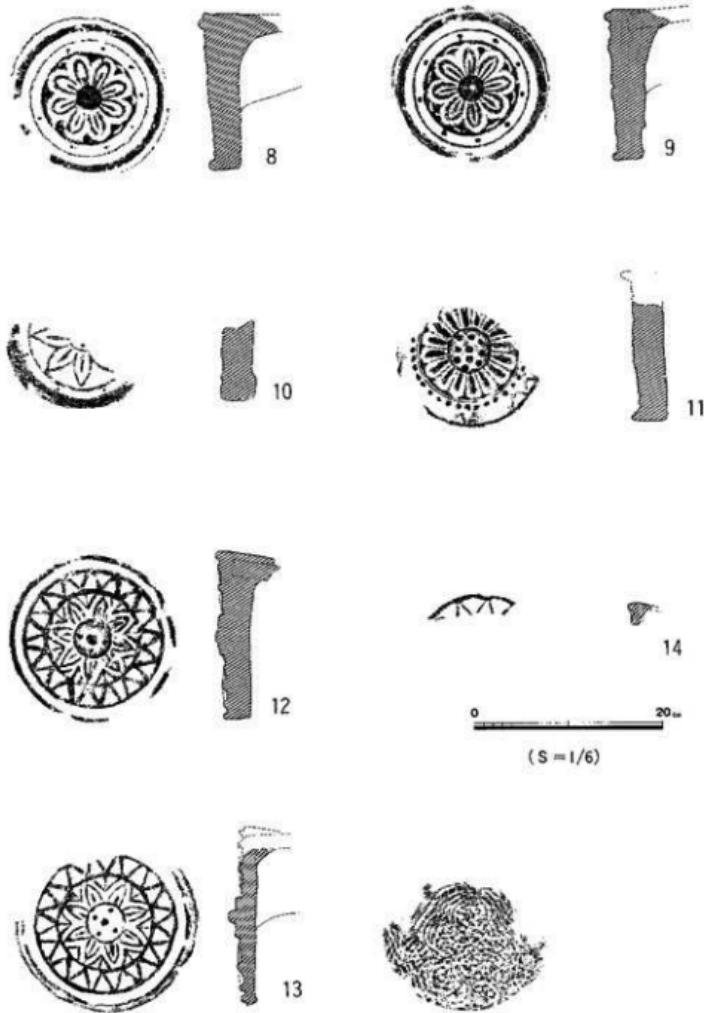
軒丸IC類(3) 凸形の中房に1+ (不明) の蓮子を配する單弁12葉蓮華文軒丸瓦であ



0 20mm

(S = 1/6)

第14図 軒丸瓦実測図(1)



第15図 軒丸瓦実測図(2)

る。蓮弁は細長く先端は丸くおさめている。焼成は軟質で淡黄褐色を呈する。軒丸ID類に較べ彫りは深い。瓦当径18.4cm、内区径14.5cm、中房径5.3cm。

軒丸ID類(4) 凸形の中房に1+8+(10)の蓮子を配する単弁12葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は細い界線で囲まれており、蓮弁は細長く先端は若干尖り気味におさめている。子葉にはV字状の線刻を有す。焼成は硬質で暗青灰色を呈する。瓦当径(18.3)cm、内区径(14.7)cm、中房径5.7cm。

軒丸IE類(5) 凸形の中房に蓮子を不均正に12個配する単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は中広で先端は丸くおさめ、子葉には線刻を有す。外縁には幅広の筋状痕が認められる。焼成は硬質で青灰色を呈する。瓦当径17.6cm、内区径12.3cm、中房径4.8cm。

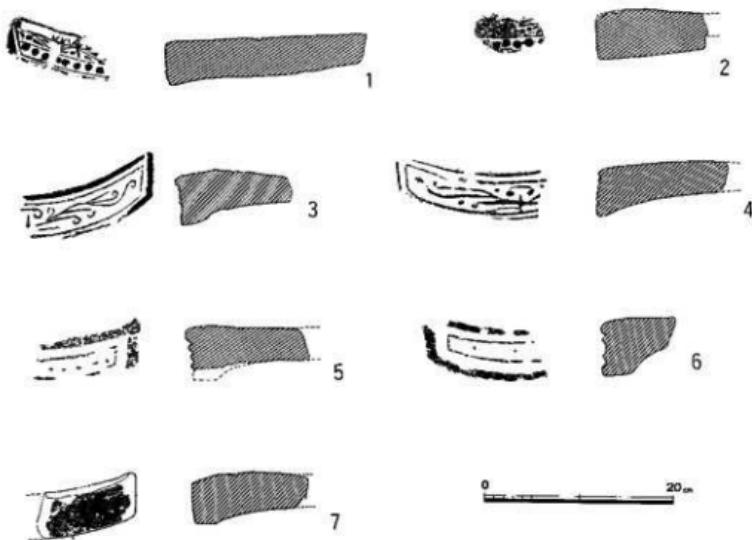
軒丸IF類(6) 破片でしか確認されず詳細は不明であるが、単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。丸瓦IE類から圓線が省略されたもので、蓮弁は中広で先端は丸くおさめ、子葉には線刻を有す。中房から外縁までは4.4cmで、外縁の幅は0.9~1.6cm以上に広がる。焼成は硬質で青灰色を呈する。

軒丸IIA類(7) 中房を圓線で区画して1+4の蓮子を配する単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は中広の重弁で、中央が隆起し、先端は若干尖り気味におさめている。突線は断面三角形でありシャープに表現している。間弁は三角形で独立している。外区内線は2本の圓線に囲まれた珠文帯に間弁に対応させて8個の珠文がめぐる。焼成は軟質で明黄褐色を呈す。同文の軒丸瓦が石見國分寺跡から出土しており、瓦当径16.0cm、内区径10.0cm、中房径3.1cmで外縁に糸切り痕が認められるものもある。焼成は軟質で乳白色を呈するものが多い。

軒丸IIB類(図15-8、9) 凸形の中房に蓮子を配さない単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。全体に範の彫りは浅く蓮弁は若干中広となり先端は丸くおさめている。間弁は三角形で隆起し、中房からは独立しているが外区内線の圓線には接している。外区内線は2本の圓線に囲まれた珠文帯に9個の珠文がめぐる。焼成は軟質で暗赤灰色を呈する。瓦当径16.1cm、内区径10.5cm、中房径3.1cm。中房に蓮子を配さないa類(8)と中房中央に棒状工具によって刺突したb類(9)に分けることができる。同文の軒丸瓦が石見國分寺跡、同國分尼寺跡から出土している。

軒丸IIC類(10) 中房を圓線で区画して(1)+(4)の蓮子を配する単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は中広で先端は尖り圓線に接する。間弁は無く、圓線と外縁に囲まれた狭い珠文帯に(8)個の珠文がめぐる。焼成は軟質で赤褐色を呈する。瓦当径15.8cm、内区径11.2cm、中房径3.2cm。

軒丸IIIA類(11) 凸形の中房に1+8+1の蓮子を配する単弁16葉蓮華文軒丸瓦である。



第16図 軒平瓦実測図 ($S = 1/6$)

蓮弁は細長く先端は丸くおさめている。内区と外区は細い沈線によって区画し、外区内縁には30個の珠文がめぐっている。外縁は三角線を呈し鋸歯文がめぐる。焼成は軟質で黄褐色を呈する。瓦当径16.0cm、内区径10.4cm、中房径5.0cm。

軒丸IVA類(12, 13) 凸形の中房に1+4の蓮子を配する单弁8葉蓮華文軒丸瓦である。中房は高く、蓮子は中心に径1.4cmの蓮子を置き、周囲に径0.6cmの蓮子を4個めぐらしている。蓮弁は細身で短く先端は尖る。間弁は独立しており、突線を圓線に接しさせて三角形にし、その中にさらに突線を入れている。外区内縁は2本の圓線で幅広に区画し、大き目の鋸歯文をめぐらしている。焼成は軟質で黄白褐色を呈する。瓦当径17.8cm、内区径10.9cm、中房径4.4cm。軒丸IVA類では製作法に差がみられ、瓦当が厚く裏面にナテ調整を行うa類と瓦当が薄く裏面に同心円の叩きを施すb類に分けられる。なお、a類とb類は間弁の構成や蓮弁中に範の傷が認められることや範の劣化による木日痕がa類、b類ともに出現するものとしないものとが認められることから同範と判断される。

軒丸IVB類(14) 破片1点しか確認されておらず、詳細は不明であるがI型式として設定した。外区に鋸歯文をめぐらすもので、軒丸IVA類の鋸歯文と比べて細い突線である。焼

成は軟質で灰白色を呈する。

軒平瓦（図16）

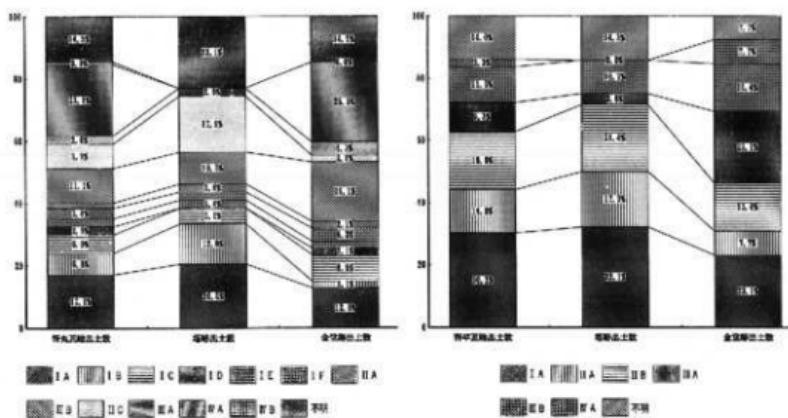
分類及びその表示方法は、内区の文様を大別の基準としてローマ数字で表示し、I類を幾何学文、II類を均正唐草文、III類を連珠文、そしてIV類を無文とした。それにつづいて型式を大文字アルファベットで表示し、小文字アルファベットについては同型式内の製作法及び形態の差を示すこととした。なお、同文異范については大文字アルファベットと小文字アルファベットの間にアラビア数字で示すものとしたが、今回の出土軒平瓦では、同文異范は認められず表示を行っていない。

出土した軒平瓦は43点であり6型式に分類した。型式別の出土状況と出土頻度は第17図に示している。

軒平IA類（1、2） 上外区に鋸歯文、下外区に珠文をめぐらす幾何学文軒平瓦である。界線に囲まれた幾何学文は細い突線で鋸歯文状に山形を5個半展開させ、太めの突線によって表現された「-・-」を「△」、「-・-」を「▽」の中に配すように基本的にはしている。平瓦部は凹面には布目痕、凸面には平行叩きの後にナテ調整を施している。推定では上弦幅20cm、弧深(4.6)cm程度と考えられ、瓦当の厚さは4.6cm、内区の厚さ1.4cm、上外区の厚さ1.2cm、下外区の厚さ2.0cmである。顎の形態には直線顎のa類(1)と瓦当から約11.5cmのところで段をなして瓦当面に至る深段顎のb類(2)とに分けることができる。焼成は硬質で青灰色を呈するもの(1)から軟質で淡黄白色を呈するもの(2)まである。顎の形態と焼成との関係は明らかにすることはできなかった。なお、a類とb類とは文様構成や範の傷から同範と判断される。

軒平IIA類(3) 中心飾りをT字状にする均正唐草文軒平瓦である。中心飾りの左右には蕨手状に表現された唐草文を4回反転させている。突線は断面三角形でありシャープに表現している。顎の形態は曲線顎である。瓦当の厚さは5.0cmで瓦当上端には横方向のケズリで整形している。焼成は硬質で暗青灰色を呈する。同文の軒平瓦が石見国分寺跡から出土しており、上弦幅27cm、弧深5.0cm、瓦当の厚さは5.3cmである。焼成は軟質で乳白色を呈するものが多い。

軒平IIB類(4) 中心飾りをT字状にする均正唐草文軒平瓦である。軒平IIA類の退化した型式で、蕨手状に表現した唐草文を中心飾りの左右に展開しているが、左右のバランスが崩れている。顎の形態は曲線顎である。瓦当の厚さは5.0cmで焼成は軟質で灰色を呈する。同文の軒平瓦が石見国分寺跡から出土しており、上弦幅(26)cm、弧深(3.0)cm、瓦当の厚さは4.8cmで焼成は軟質で暗青灰色を呈する。



軒丸瓦出土状況表

軒平瓦出土状況表

第17図 軒瓦の型式別出土状況

軒平III A類(5) 連珠文軒平瓦である。すべて破片での確認であり、詳細は明らかではない。珠文は太い界線により区画した内区に1.5cm程度の狭い間隔で展開させている。頭の形態は曲線頭で、瓦当の厚さは5.2cm、焼成は軟質で淡黄色を呈する。

軒平III B類(6) 連珠文軒平瓦である。すべて破片での確認であり、詳細は明らかではない。珠文は界線により区画した内区に4.5cm程度の間隔を空けて展開させている。頭の形態は曲線頭で、瓦当の厚さは5.2cm、焼成は軟質で淡黄色を呈する。同文の軒平瓦が石見国分寺跡から出土している。

軒平IV A類(7) 素文軒平瓦である。破片1点しか確認されておらず、詳細は不明である。瓦当面は素文でケズリの後にナテ調整を施す。頭の形態は曲線頭で、瓦当の厚さは4.0cm、焼成はやや軟質で淡黄褐色を呈する。

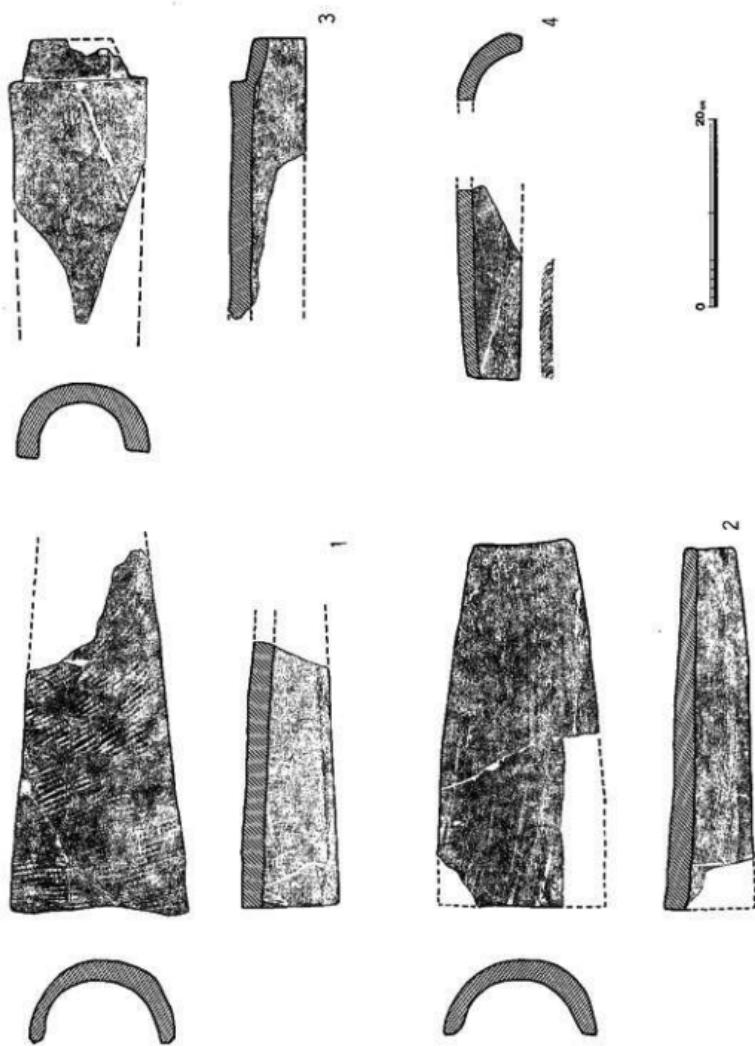
丸 瓦 (図18)

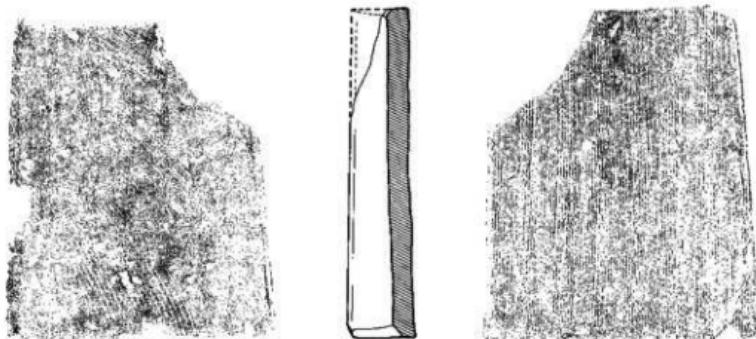
丸瓦は行基式のものが多く玉縁式は少ない。(1)は行基式で、広端の幅は18.8cmで厚さは均一ではない。凸面は細かい格子叩きと平行叩きを施した後に部分的にナテ調整を行っている。凹面は細かな布目痕を残す。側面はケズリにより2~3面取りとする。焼成は硬質で灰白色を呈す。(2)も行基式で、全長39cm、広端の幅は18cm、狭端の幅は10.5cmで厚さは狭端側ほど薄くなり、1.5cmとなる。凸面は丁寧なナテ調整を行っている。凹面は細かな布目痕を残す。側面はケズリにより2面取りを行う。焼成はやや軟質で灰褐色を呈す。(3)は玉縁式で、玉縁部長さ4.5cm、幅11.3~8.4cmである。厚さは均一ではない。凸面は丁寧なナテ調整を行っているが一部綱叩きを残す。凹面は細かな布目痕と糸切り痕を残す。側面は1面取りとする。焼成は軟質で乳白色を呈す。(4)は行基式の狭端部片である。厚さは薄い。側面には糸切り痕が認められる。焼成は軟質で灰白色を呈す。出土した丸瓦のうち側面に糸切り痕が認められるものは、すべて破片であり詳細は明らかではない。今のところ玉縁式は認められず、焼成は軟質で明黄褐色のものが多い。半截時に糸切りを使用する製作法のものを一群の丸瓦として捉える必要があるが、整理が不十分であり、検討は今後の機会にゆずる。

平 瓦 (図19, 20)

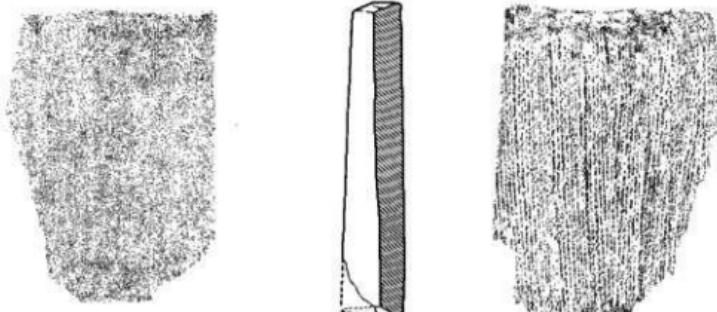
平瓦は多量に出土しているが、完形に近いものは少ない。図19の(1)は全長36cm、広端部幅26.7cm、狭端部幅(23.2)cmを測り、厚さは2.5cmである。凸面は縦方向の細かい綱叩きを残す。凹面は布目痕と糸切り痕を残す。側面は1面取りとする。焼成は硬質で灰白色を呈す。(2)は全長33.6cm、広端部幅(23.5)cm、狭端部幅(21.5)cmを測り、厚さは3.0cm

第18圖 九瓦夷測圖 ($S = 1/6$)





1



2

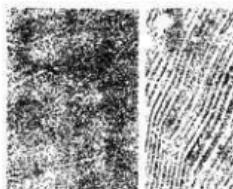


0 20 cm

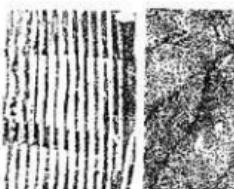
第19図 平瓦実測図 ($S = 1/6$)



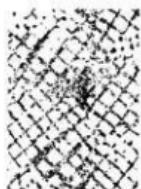
1



2



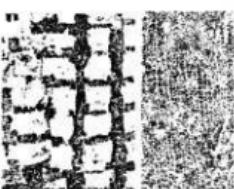
3



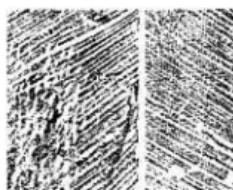
4



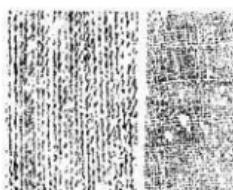
5



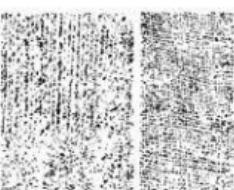
6



7



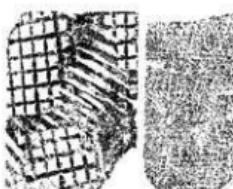
8



9



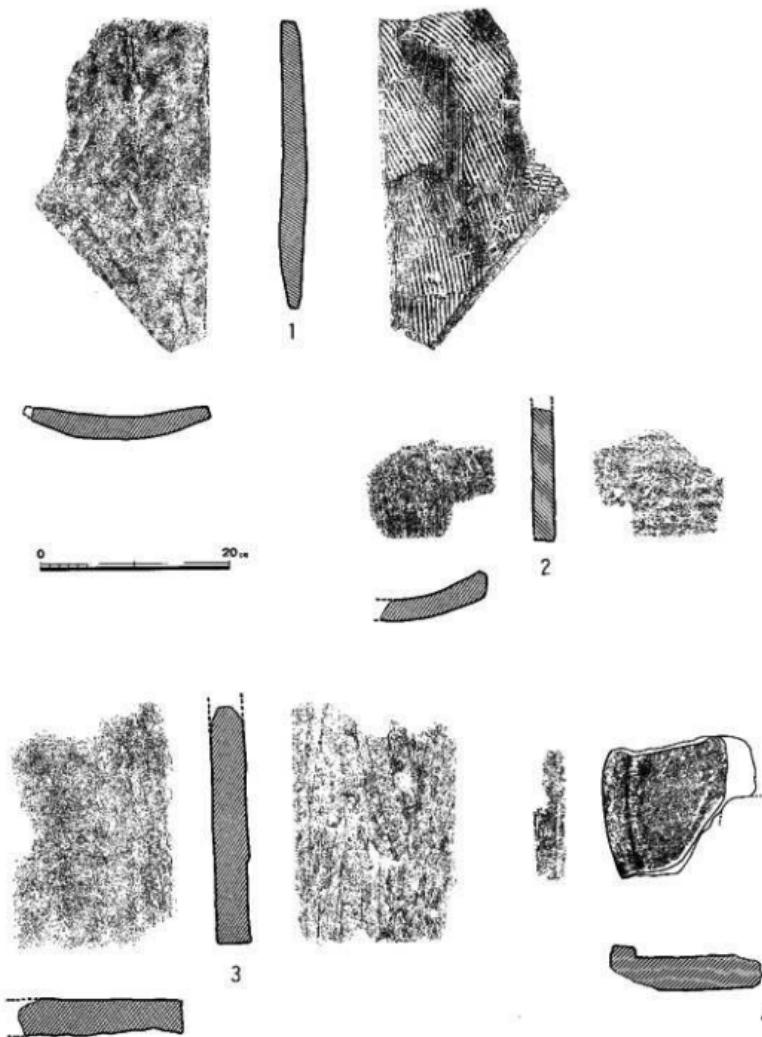
10



11

A horizontal scale bar labeled "0 10 cm".

第20図 平瓦調整拓影 ($S = 1/3$)



第21図 道具瓦実測図 ($S = 1/6$)

である。凸面は縦方向の細かい繩叩きを残し、凹面は布目痕を残す。側面は1面取りとする。焼成は硬質で灰褐色を呈す。

図20は平瓦の調整痕を集成したものであるが、整理が不十分であり粗いものである。(1)は凸面に縦方向のハケ調整を施すもので、凹面は細かな布目痕を残す。(2)は凸面をナテ調整し、凹面は糸切り痕が強く残る。(3)は凸面に平行叩きを施し、凹面は布目痕を丁寧なナテ調整により消している。(4)～(6)は凸面に格子叩きを施すもので、格子の大きさにバラエティーがみられる。凹面は布目痕を残すが、(5)はナテ調整を行っている。(7)～(10)は凸面に繩叩きを施すもので、繩の大きさに(7)～(9)の細かなものと(10)の大きなものがみられる。(7)は凹凸面に強く糸切り痕を残す。(9)は凸面に離れ砂が付着している。凹面は布目痕を残す。(10)は凸面に平行叩きと格子叩きが認められる。

道具瓦（図21）

隅切瓦（1、2）

隅切り瓦2種を確認している。(1)は平瓦を斜めに切り取るもので、凸面は平行叩きと格子叩きを施した後に板状工具により一部ナテ調整を行っている。凹面は布目痕を丁寧なナテ調整により消している。切り取った凹凸面側はケズリにより調整を行っている。焼成は硬質で青灰色を呈す。(2)は平瓦の隅をL字状に切り取るものであるが、破片でしか確認していないため詳細は不明である。凸面はナテ調整を行い。凹面は布目痕を残す。焼成は軟質で明黄褐色を呈す。

埠(3)

出土した埠は破片であり、量的にも少ないものであった。完形に近いものは第10-1調査区で確認しており、縦32cm、横28cm、厚さ3.5cmを測る。(3)は埠にあたる破片である。側縁はケズリとケズリ後に丁寧なナテ調整を行う。焼成は硬質で青灰色を呈す。厚さは3.7cmである。

鬼瓦(4)

鬼瓦は小片で1点しか確認しておらず全体を窺うことはできない。鬼瓦は素文と考えられ、表面に布目痕がみられる。裏面は繩叩き後にナテ調整を行っている。側縁は弧を描き、幅2cm、高さ1.2cmの突帯が貼付られている。厚さは3.3cmである。なお、表面の布目痕は突帯を越えて側縁に至っている。

鶴尾(図版12-5)

小片の鶴尾を1点確認しているが、全体を窺うことはできない。表面はナテ調整の後に幅3.5cm、高さ0.9cmの台形状の突帯が貼付されている。裏面にも表面の突帯に直交するよ

うに幅6cm、高さ3.3cmの突帯が貼付られている。段型を刻む鶴尾と考えられる。

2. 土 器 (図22~24)

須恵器 (図22)

須恵器は各調査区から出土しているが、図化したものは金堂跡、塔跡の瓦溜り、及び第12~3調査区瓦溜り層の上に堆積した層から出土したものである。なお、(2)は第14~1調査区から出土した甕片である。(1)~(10)は蓋である。(1)(2)は輪状つまみ有し、口縁部は体部から屈曲して内傾する。(1)の口径は14.5cmである。(3)(4)は扁平な宝珠状つまみを有す。(6)~(10)は輪状つまみが外反して伸び、端部は尖り気味となる。口縁部は丸みをもち端部を内湾させる。天井部は回転ヘラ切りを施す。口径は12~13cm、器高は3cm前後である。(10)は短く丸みのある輪状つまみを有し、天井部に回転ヘラ切り痕を残す。(12)は輪状つまみが外反し、端部は丸みを有する。口縁部は嘴状となる。(13)は輪状つまみが短く直立し、口縁部は嘴状となる。口径は14.1cm、器高は3.5cmである。(10)は天井部に回転糸切り痕を有す。天井部が小さくなり、全体的に小型化した感を受ける。口径は12cm、器高は2.9cmである。(19)~(23)は環で、(19)以外は底部に回転糸切り痕が認められる。(19)~(23)は高台を有す。(19)は高台が底部内側に若干入った位置から「ハ」字状に踏ん張り、体部は直線的に開く。(17)の底部は回転糸切り後にナデによる沈線をめぐらせ、疑似的な高台としている。(18)(19)は底部縁に0.2cm程度の断面半円形の高台を貼付けている。(20)~(23)は高台を有さないもので、(21)は体部に若干丸みをもたせながら口縁を外反させる。口径は12.8cm、器高は4.1cmである。(24)は皿で、底部に回転糸切り痕を残す。

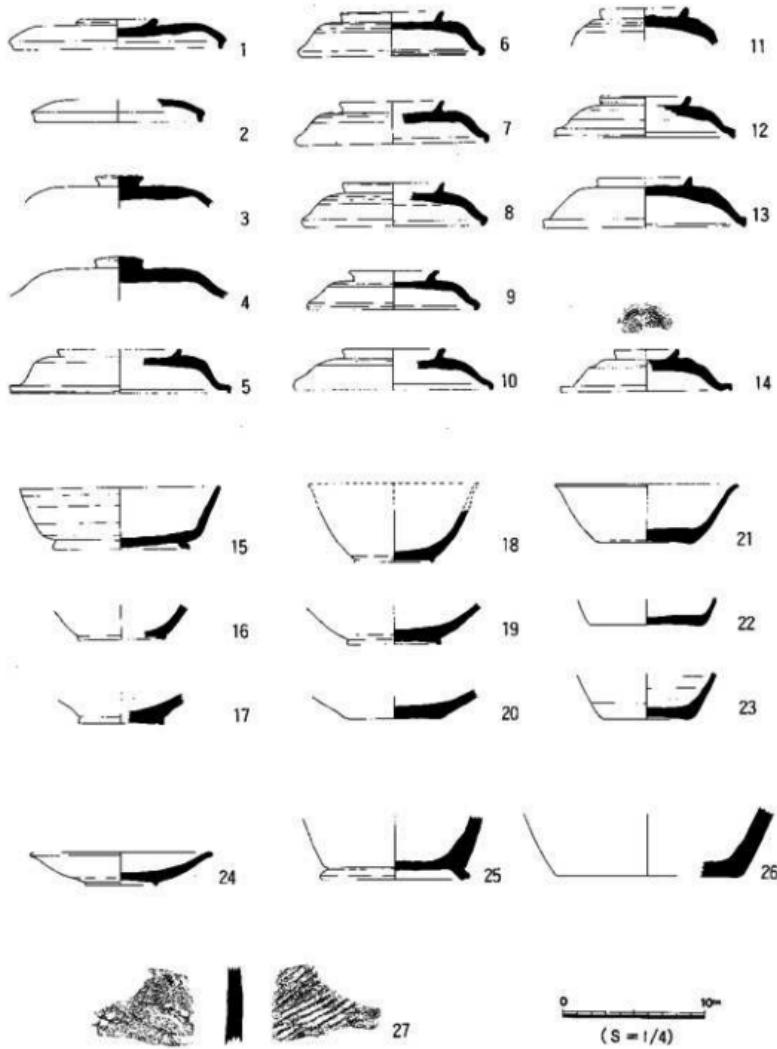
土師質土器 (図23)

(1)は第7調査区、(2)は第16調査区から出土し、(3)~(5)は第14~1調査区の包含層中、(10)~(11)はP1埋土から出土した。(15)(16)については小鐵冶跡で出土している。(1)は高台付壺で、体部に若干丸みを有し、口縁部は外反する。口径は14.2cm、器高は4.5cmである。(2)は体部が直線的に開く壺で、器高は高い。(3)~(5)は体部に丸みを有す壺である。(10)は小皿、(11)は台付皿である。(16)は外耳土器である。口径は(30.2)cm、器高は7.3cmである。一对の耳に穿孔を有す。

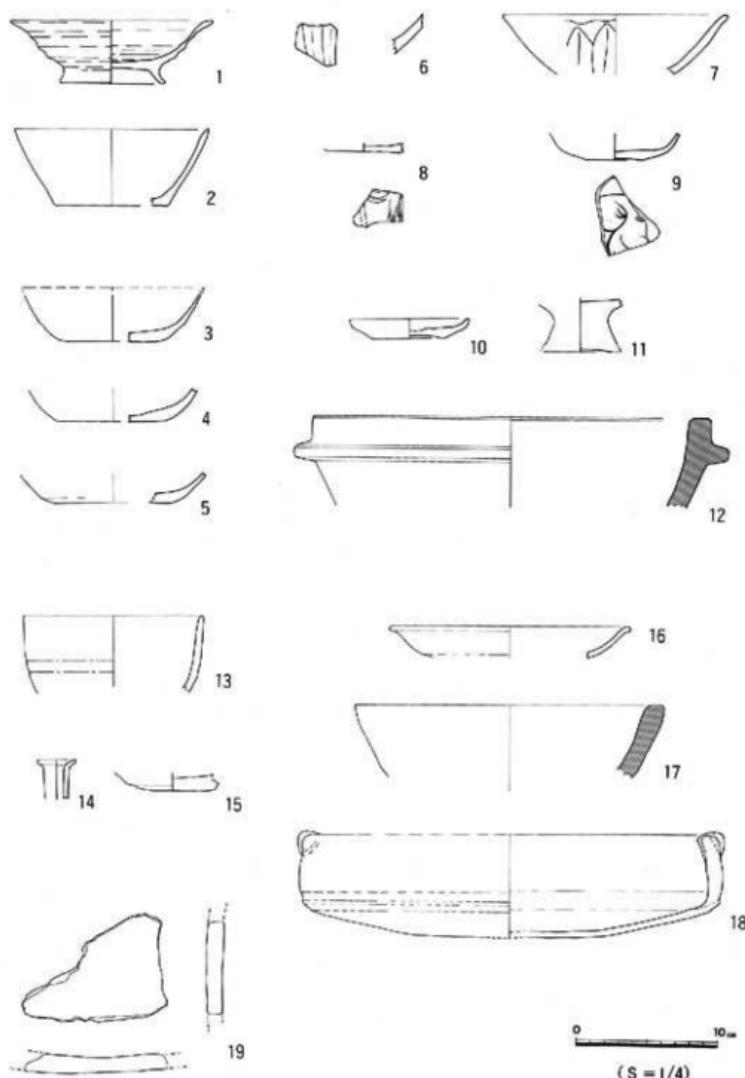
輸入陶磁器 (図23)

(6)は段状造構を覆う5層中より出土し、(7)(9)は第14~1調査区の包含層中から出土している。(6)(7)は鎬蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗で、(8)と(9)は白磁皿である。(8)の内底には櫛描きと片彫りの沈線が認められ、(9)には草花文を施す。

国産陶磁器 (図23)



第22図 土器実測図(1)



第23図 土器実測図(2)

(13)(14)(16)は小鐵治跡で出土している。(13)は唐津焼の碗、(14)は伊万里焼の小瓶、(16)は唐津焼の皿である。

石製鍋 (図23)

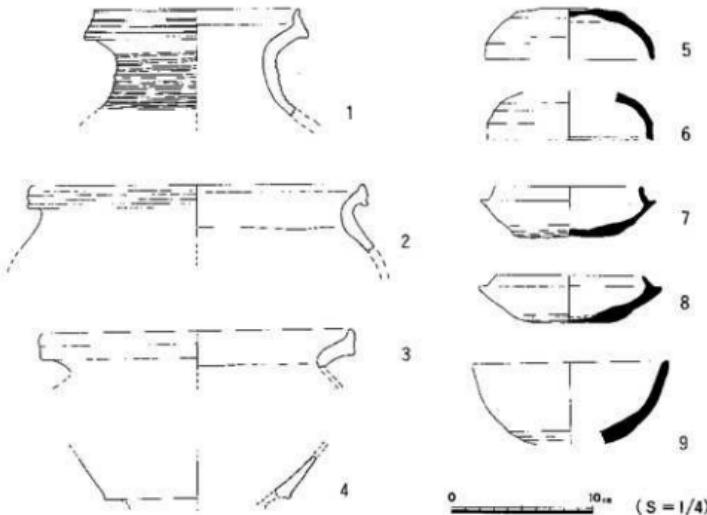
(12)は第13-2調査区、(17)は小鐵治跡で出土している。(12)は滑石製で、口縁部は直線的に立ち上がる。鉢は断面正台形を呈している。(17)は全体的に粗い作りである。

銅・鉄製品 (図23-19)

銅製品は段状造構の床面から出土したもので、わずかに弧を描く板状の製品である。重量は314g。鉄製品は瓦溜り内から鉄釘が出土している。

寺院建立以前の遺物 (図24)

Ⅲ表土である黒色土中より磨製石斧、弥生土器、上師器、古墳時代の須恵器が出土しているが、小片が多く図化できたものは少ない。(1)～(3)は壺形土器で、(1)は口縁部が内傾して立ち、頸部にはU字状の沈線がめぐる。(4)は小谷式の鼓形器台である。(5)～(9)は須恵器である。(5)(6)は蓋で、(5)は天井部にケズリがみられず、口縁端部は丸みをもつ。(7)(8)は壺で、底部にケズリを施す。特に(8)は平坦にケズリを施す。(9)は高环の壺部と考えられる。この他には磨製石斧の欠損品が1点出土している。



第24図 土器実測図(3)

VI. まとめ

平成元年度から平成4年度までの4年次に及ぶ下府廃寺跡の調査により、西側に金堂跡、東側に塔跡を配す法起寺式に近い伽藍配置であることが明らかにできた。また、寺院建立時の状況や整地状況も断片的ではあるが明らかにしている。

平成4年度をもって下府廃寺跡の調査は完了することになるが、未だ調査及び整理は不十分であり、解明すべき点は多いものと考えている。ここではこれまでの調査の成果を整理してまとめとしたい。

遺構

下府廃寺跡に関わる遺構として金堂跡と塔跡を確認している。両基壇は東西6.94m離れ、伽藍中軸線は真北より東に12度振っている。

金堂跡は東西長15.22m、南北残存長11.96mを測る。基壇南縁は確認できず、北縁については塔基壇の北縁とほぼ揃っている。基壇の上面には礎石が1個残されているが原位置を保っていなかった。調査においても礎石や根石等の痕跡を明らかにできていないが、調査面積が狭いこともあり、建物の平面と残存状況については今後の課題となろう。基壇の構築状況は、若干南側に傾斜するもののほぼ平坦に地山を整地し、部分的ないしは南側を中心に版築を用いて築土を盛っている。基壇外装については第10-1調査区で縦32cm、横28cm、厚さ3.5cmの塼を下段に3枚、上段に1枚確認している。また、第9-3、16調査区では人頭大の石が各1個認められているが、塼、石とも傾斜する基壇確認面に貼付いた状況であり、残存状況が悪いものと考えられ、金堂跡での外装は明らかにできなかった。

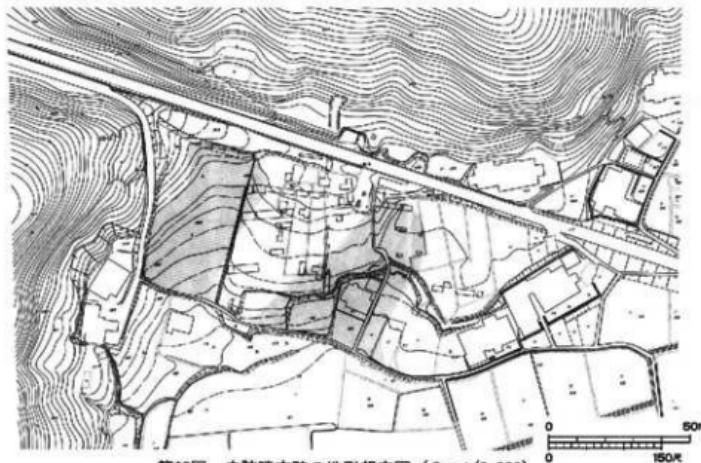
塔跡は基壇上面に心礎と四天柱、側柱の礎石が各1個残されているが、今回の調査によって、新たに北西隅にあたる側柱の礎石抜取り穴を確認した。これにより塔初重平面を図上で復元することができ、3間四方を等間隔に割付けた場合には、1間が2.4m(8尺)となり、1辺は7.2m(24尺)と推定できる。基壇については南縁の確認はできなかったが、東西方向で1辺13.26mを測る。基壇外装は石と瓦により築き、東縁では階段も確認できた。外装は第7調査区で軒平IIA類、第13-1調査区で軒平III B類が認められることから創建時のものではなく、また、構築方法が両調査区では異なっていることから最低2回以上の改修を行っているものと考えられる。階段は推定幅2m、奥行51cmを測り、外装構築後に付設されたものである。構築は瓦片混じりの土を盛り、踏み面は主に扁平な石を使用し、北側縁には登葛石にあたる石も認められる。階段数は3段程度と考えられる。基壇の構築状況は基壇北西側を中心に地山を整地し、さらに塼込み地業を行った後

に版築を行っている。ただし、版築は基壇下部しか行っておらず、上部は版築を用いずに築土を盛っている。他の基壇部分は南東側に傾斜する旧表土上に整地土を置き、版築を用いずに築土を盛っている。基壇高は現存する心礎と礎石を基準にすると北西隅で77cm、東縁中央で1.34mを測り、基壇基底部は南東側に若干傾斜している。

寺院建立時の地形と整地

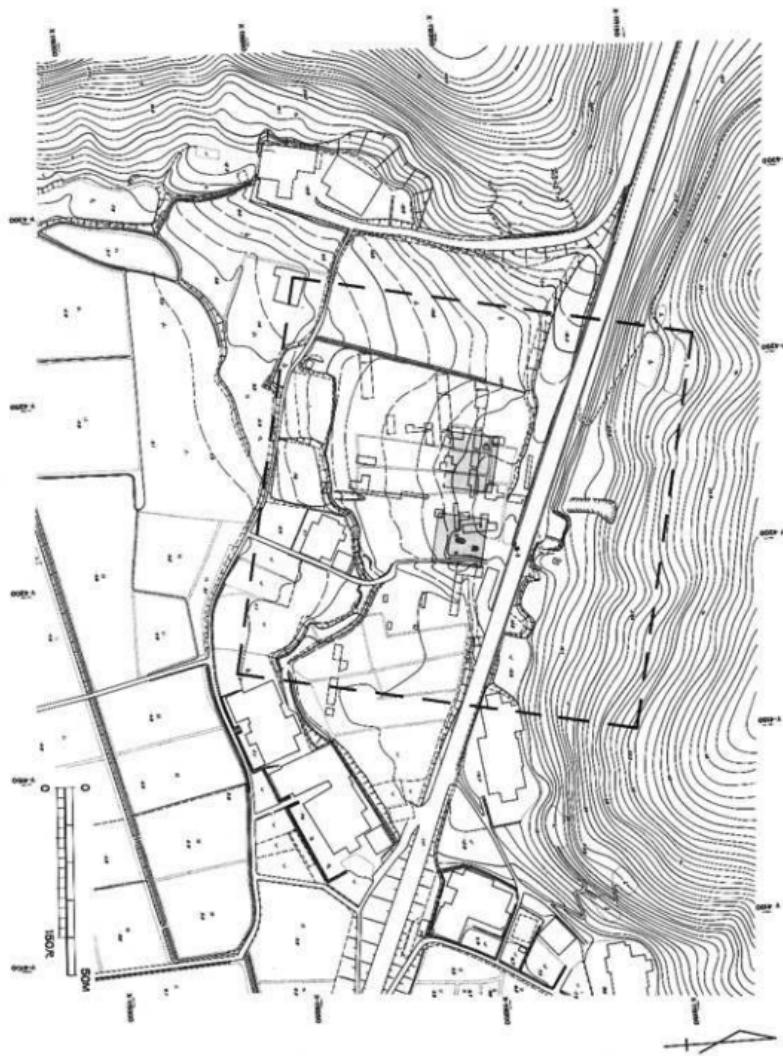
今回の調査により断片的ではあるが寺院建立時の地形を明らかにすることができた。現在の下府廃寺跡は東西160m、南北70mの南側に緩やかに傾斜する微高地上に立地するが、第9-4・5調査区で西側、第13-1・2調査区では南東側に傾斜する地形を確認し、第20調査区では表土面より2m下から旧表土が確認された。また、第14調査区では緩やかに西側に地山が傾斜していた。他の各調査区の成果からみても第10調査区から第6調査区方向へ延びる舌状の尾根（西側尾根）と第14調査区を設定した個所に尾根（東側尾根）が延びていたものと考えられる（図25）。

寺院の建立に伴い西側尾根（東側尾根？）上は整地され、西側尾根の東、西側に入り込んでいる2本の谷は整地土により埋立てている。しかし、谷への整地は完全に行われてはおらず、西側尾根の西側の谷は、谷の東面の傾斜を中心に緩やかにした程度と思われ、依然谷は残る。西側尾根の東側の谷は第13-1・2調査区の状況からみて、谷奥を塔基壇基底部のレベルまで整地していたものと考えられるが、第12-2・3調査区では整地の規模が小さいことから、谷の開口部は殆ど整地土を盛っていない可能性があり、東側の谷につ



第25図 寺院建立時の地形想定図 ($S=1/2,000$)
(想定する谷をアミで表示)

第26図 下府院寺跡の施設配置と寺域想定図 ($S = 1/1,500$)



いても小さな谷状となって残っていたものと思われる。

伽藍配置と寺域

金堂跡、塔跡は後背の北側丘陵に接近させて、西側尾根が最も広くなる基部に築造している。これは伽藍を配する空間を確保するためと考えられ、金堂基壇西縁は地山の傾斜変換ぎりぎりに置いている。しかし、塔基壇の南側半分は地山上にのりきらず、伽藍中軸線も真北より東に12度振っている。結果として寺院建立時の地形に大きな影響を受けたためと考えられる。

講堂跡については金堂跡と塔跡の後背に配置する空間がなく、第10-2、15調査区でも確認することはできなかった。講堂の配置は必ずしも金堂と塔の後背に位置するとは限らず、変則的な場所に設けられていた可能性もあるが、逆に『出雲国風土記』に記載される新造院が七堂伽藍を備えたものではなく、²¹⁾地方寺院においては伽藍が整っていないのが一般的な在り方ではないかという指摘もある。管見でも広島県の宮の前廃寺跡、明宮地廃寺跡、²²⁾本郷平廃寺跡や山口県の長門深川廃寺跡には講堂が備えられておらず、県内においても天寺平廃寺跡には講堂が備えられていない可能性がある。下府廃寺跡においても講堂が備えられていない可能性が高いものと考えられ、回廊についても同様に備えられていない可能性がある。金堂跡と塔跡の配置位置からみて当初から講堂を配置する計画が無かったのではなかろうか。なお、門跡については不明である。

寺域については1町四方と半町四方を想定して調査を実施したが区画施設を確認することはできなかった。しかし、半町四方を想定して設定した第9-5、12-2・3、20、21、23調査区では整地上が認められることから、半町四方を越えて整地が行われていたことが確認でき、また、地形的にも1町四方を想定した場合には、東側の南北ラインは東側尾根上にあたり、西側の南北ラインは西側尾根の西側に入り込む谷にあたっている。また、南側の東西ラインについては微高地帯にあたることから、現時点では1町四方の寺域を想定しておきたい（図26）。

軒瓦

軒丸瓦は117点出土し、これを4大別12型式として分類している。I類は現在のところ直接系譜をたどれるものは知られておらず、下府廃寺跡において展開する一群として捉えておきたい。IA類は硬質で蓮子1+6を有す整美な瓦当文様をもつが、IB類は軟質で蓮子1+8となり瓦当文様も便化することから、IA類より若干後出すると考えられる。ID類は硬質で子葉中に線刻を施すのに対し、IC類は軟質で子葉中に線刻が無くID類の亜流として位置付けられる。また、単弁12葉のID類は、単弁8葉のIE類へと蓮弁数を減らし、さらにIE類から圓線が消えた瓦当文様を有すIF類へと連続的に変化する。

II類は石見国分寺跡・同国分尼寺跡・同國分寺瓦窯跡出土瓦（以下、石見国分寺瓦）の一群を含んでいる。IIA類とIIB類がその石見国分寺瓦であり、IIA類はその創建期瓦として位置付けられる。内田律雄氏による石見国分寺瓦の型式分類（以下、内田分類）では軒丸IB1類にあたるもので、同文異範（内田分類の軒丸IB2類）の存在も確認されているものの、下府廃寺跡では出土していない。IIB類は内田分類のIB3類にあたる。IIC類については直接系譜をたどれるものは知られていない。IIIA類についても直接系譜をたどれるものは知られていないが、細弁と三角線に鋸歯文を施している点で時期的、広域的特徴を有している。IV類は外区に鋸歯文をめぐらすもので、石見国内では大田市の天王平廃寺跡と旭町の重富遺跡の出土軒丸瓦がIVA類と同じ文様構成をもつものとして知られているが、近年では天王平廃寺跡出土軒丸瓦が單弁8葉に間弁が入ることから系譜の異なるものとして捉え、重富遺跡出土軒丸瓦については8世紀前半～中葉頃として考えられている。IVB類は外区のみの破片であり内区は不明である。天王平廃寺跡出土軒丸瓦の外区に似ているものの、鋸歯文の突線、外線、焼成は異なる。

軒平瓦は43点出土し、これを4大別6型式として分類している。IA類は現在のところ直接系譜をたどれるものは知られていないが、上外区に鋸歯文、下外区に珠文をめぐらし、内区には唐草文ではなく幾何学文が施されている点で特徴的である。類は無頭と深段類がみられる。均正唐草文を施すII類と連珠文を施すIII類は何れも石見国分寺瓦を主とする一群として捉えている。IIA類は石見国分寺創建期瓦として位置付けられる。内田分類の軒平IB2類にあたり、同文異範（内田分類の軒丸IB1類）の存在も確認されているが、下府廃寺跡では認められなかった。IIB類も内田分類の軒平IB4類にあたるもので、IIA類の退化型式と考えられる。IIIA類は初めて確認された型式であり、IIIB類は石見国分寺跡で出土している。IIIA類はIIIB類に較べて珠文、界線とも確りとし、連珠文も密に展開することから、IIIB類が後出するものと思われる。したがって、今後石見国分寺跡からIIIA類が出土する可能性もありえる。

組合せについては、広域的特徴と共に有す軒丸IIIA類と軒平IA類が組合うものと考えられる。次に下府廃寺跡出土の石見国分寺瓦を取上げると、軒丸IIA、IIB類と軒平IIA、IIB、IIIB類が上げられ、うち軒丸IIA類と軒平IIA類は石見国分寺創建期瓦として組合い、残る軒丸IIB類は軒平IIB類と組合う可能性がある。軒丸IA、IB、IC、ID類については該当する軒平瓦がみあたらず、平瓦と組合っていた可能性が高い。軒丸IVA類については、天王平廃寺跡出土軒丸瓦、重富遺跡出土軒丸瓦とともに厚手で広端部に調査が施された平瓦と組合い。また、第12-2・3調査区瓦窯り出土の軒瓦が軒丸IV類のみであったことから軒丸IVA類も平瓦と組合っていた可能性がある。なお、下府廃寺跡でも厚

手で広端部隅を切り取り、端部に調整を施す平瓦が認められるが、整理ができるおらず、検討は今後の機会にゆずりたい。

軒瓦の時期については瓦当文様や丸瓦部との接合等から推測するほかはなかった。創建期瓦は軒丸IIIA類（軒平I A類）または軒丸I D類が考えられ、白鳳時代末に位置付けてよいと思われる。軒丸I C類、軒丸I A類及び軒丸I B類については8世紀前半に収まると考えられるが、軒丸I A類と軒丸I B類の瓦当面には離れ砂が付着していることから8世紀中葉頃まで降る可能性もある。軒丸IVA類は8世紀前半～中葉頃に位置付けておきたい。石見国分寺創建期瓦である軒丸IIA類と軒平IIA類については、「統日本紀」の大平勝宝8年（756年）12月巳亥の項に石見国分寺の名をみることができることから8世紀中葉に位置付けることができる。この他、軒丸I E、I F、II B、II C類、軒平II B、III A、III B、IVA類は8世紀後半に収まるものと思われる。

須恵器

下府廃寺跡が建立され存続した時期の須恵器は量的に多いものではなく、小片が主であった。現在最も古いと考えられる須恵器は、輪状つまみを有し、口縁部は体部から屈曲して内傾する蓋（図22-1）で、高広編年III B期にあたり、実年代は7世紀末から8世紀前葉に置くことができる。この蓋は石見国内では未だ出土例が少ないが、仁摩町の楡ノ木谷横穴群第III支群1号穴³³の玄室内から良好な資料が出土している。第9-3-5調査区の瓦溜りから比較的多く出土したのが、輪状つまみが外反して伸びて、端部は尖り気味となり、口縁部は丸みをもって端部を内湾させる蓋（6-10）で、山口県の見島ジーコンボ古墳群第16号墳出土の蓋と類似している。実年代は8世紀末から9世紀前半にあてている。

坏については底部に回転糸切り痕を残すものが大半を占めていた。石見国内において回転糸切りが出現するのは9世紀中葉頃³⁴であり、回転糸切り痕を有す蓋（10、III 20）、坏（16-23）はその時期以降に置くことができる。高台を有す坏のなかで、底部にナテによる沈線をめぐらせて疑似的な高台を有す坏（17）と高さ0.2cm程度の断面半円形の高台を貼付する坏（18、19）は、大田市の白坏遺跡から出土した「延喜九年（909年）」銘のある木簡と共に伴した坏と類似性が認められることから、10世紀初頭を中心前後する時期のものとして捉えておきたい。

下府廃寺跡の立地する微高地は、本来2本の尾根が南西方向に伸びており、弥生時代後期以降、生活が営まれていた。白鳳時代末には整地が行われて下府廃寺が建立された。寺院は1町四方の寺域を有し、その中心には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置が採用されていたものと推定される。しかし、10世紀前半頃までには下府廃寺は廃絶したものと

思われる。その後、12～13世紀には段状遺構や柱穴群が現れて、青磁、白磁も使用されていた。そして近世前半に小さな鍛冶屋が営まれた後、畠地として現在に至っている。

註

- (1)近藤正「『出雲國風土記』所載の新造院とその造立者」『山陰古代文化の研究』昭和53年
- (2)妹尾周三「古代（西日本）」『考古学ジャーナル No.335』平成3年
- (3)福山市教育委員会『史跡宮の前庵寺跡』昭和52年
- (4)広島県立埋蔵文化財センター『明官地庵寺跡－第3次発掘調査概報－』平成元年
- (5)御調町教育委員会『本郷平庵寺』平成元年
- (6)山口県教育委員会『長門深川庵寺』昭和52年
- (7)斐川町教育委員会『天寺平庵寺について』『八雲立つ風土記の丘 No.84』昭和62年
- (8)内田伸雄「石見国分寺瓦について」『山陰考古学の諸問題』昭和61年
- (9)足立克己、林健亮両氏に御教示頂いた。
- (10)浜田市教育委員会『石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報』平成元年度
- (11)出土地不明ではあるが、浜田市郷土資料館に軒平III類が石見国分寺瓦と共に収蔵されていた。
- (12)前掲註(9)
- (13)林健亮氏に全般的な御教示を頂いたが、執筆者の力不足により十分生かすことができなかった。
- (14)島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』昭和59年
- (15)仁摩町教育委員会『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』平成元年
- (16)山口県教育委員会『見島ジーコンボ古墳群』昭和58年
- (17)川原和人・丹羽野裕両氏は回転条切りの出現を日脚編年IX期とし、実年代を9世紀前～中葉にあてている（島根県教育委員会『日脚遺跡』昭和60年）。また、野田直子氏は9世紀第2四半期に出現するものの主流はヘラ切りであるとする。（「石見地方における歴史時代須恵器についての一考察」島根考古学会2月例会発表要旨 平成4年）
- (18)白坏遺跡の資料については遠藤浩巳氏のご好意により実見させて頂いた。大田市教育委員会『白坏遺跡発掘調査概報』平成元年

付. 片山古墳測量調査報告

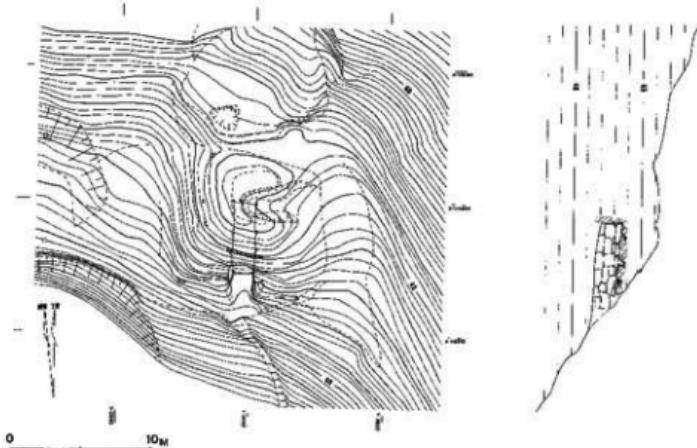
1. 位置と立地

片山古墳は、浜田市下府町1930番地、下府庵寺から500mほど東の丘陵斜面に所在する（図4）。立地は、下府平野を見下ろす丘陵の中腹、南面する急な斜面に位置する。古墳と平野の比高は、約30mである。この古墳の横穴式石室は、古くに開口しており、明治時代にはイギリス人考古学者・W・ゴーランドが、石室の実測図を作成している。¹¹⁾

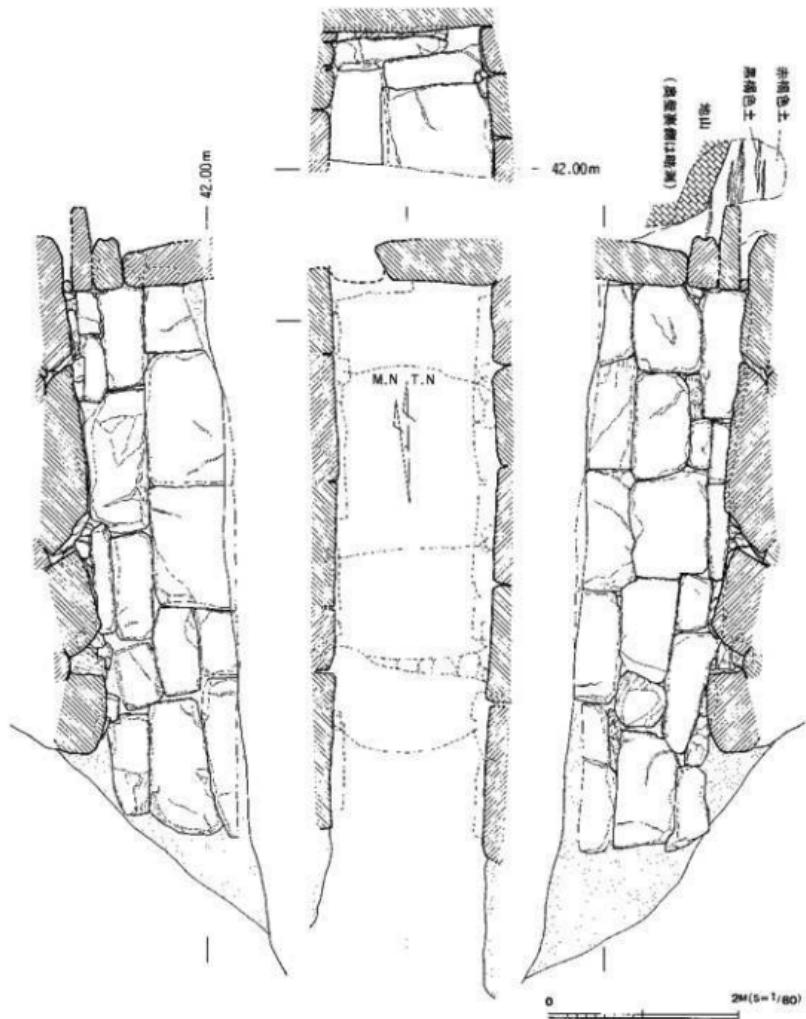
2. 墳丘

墳丘は、墳頂部に攪乱坑がある他は、比較的遺存状況が良好である。従来、円墳であるとも言われてきたが、今回の測量調査によって方墳であることが明らかとなった（図27）。墳丘の築成としては、南西に面する斜面を上から見てL字形に掘削することにより、墳丘の北辺と東辺を削っている。また、墳丘西側には不自然な平坦面があるが、この部分を削ることで墳丘西側を際立たせたかもしれない。このような築成状況のため、現状でも墳丘の高さは、南・西辺と山側の北・東辺では著しい差を生じている。

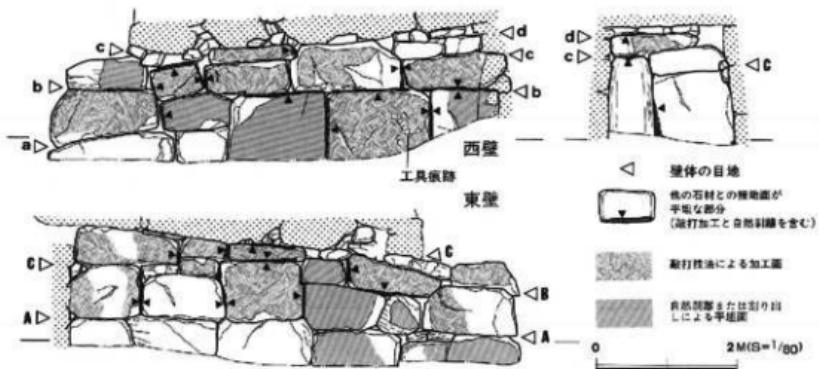
墳丘の北・南・西辺には、人頭大の角礫が露出しており、東辺でも、ボーリング調査により石材の埋没が推定されることから、墳丘斜面には外護列石が廻っていると判断される。さらに、南辺端から高さ3.5mの位置には、長さ2.5mにわたり、列石が帶状に露出しており、これに対応するレベルで、西辺と北辺にも列石の一部が散見される。このことか



第27図 片山古墳地形測量図 (S=1/400)



第28図 片山古墳石室実測図



第29図 石室壁面図

ら、外護列石は2段に廻っていると推定される。以上の観察から、片山古墳は外護列石を廻らす2段築成の方墳と判断される。

現状での墳丘の見かけの規模は以下のとおりである。

長さ 南北12m 東西12m 高さ(南辺) 約5m (上段) 1.5m (下段) 3.5m

3. 横穴式石室

石室は、墳丘南辺の裾に開口し、奥壁が墳丘のほぼ中央に位置する。石室天井石内面から墳頂までは、現状で約2.8mを測る。主軸は、真北N3°Wである。石室は、玄室と羨道の区別のない無袖形のものである(図28)。

石室床面は流入土のため不明であるが、現状での規模は、以下のとおりである。

全長6.4m 奥壁 幅1.75m 高さ1.9m 羨門 幅1.7m 高さ1.4m

石室側壁には、ブロック状に加工された、いわゆる「切石」が部分的に使用されている(図29)。仕上げの加工技術は、「敲打具技法」によるものであり、これにより、壁面と他の石材の接地面を整えている。これらは「切石」とは言っても、岩盤から「切り出し」したものではなく、自然石の凸部など必要な部分を敲打して面と整えたものであろう。西壁の基底石の一つには粗作り段階の、「刀付きタガネ」または「チョウナ」などによる加工痕が見られる。また、東壁には、切り組み積みを行っている部分も認められる。

奥壁は、両側壁にはさまれていることから、石室構築に際して、まず奥壁を設置したと推定される(第1工程)。側壁は、目地のよく通る部分が図29の西壁目地bと東壁目地Aで認められる。ここに石室構築の一工程があると思われるが、西壁は、基底の石材に東壁よりも大型のものを用いているため、東西の壁基底石上面にレベル差を生じている。東壁

目地Aにレベル的に対応するのは、西壁目地aであり、西壁目地bに対応するのは、東壁目地Bであるが、このレベル的に対応する目地は、奥まで一貫していない。また、東壁目地Cと西壁目地cは、奥壁の基底石まで一貫して通り、ここにも石室構築の一工程を認めることができる（第2工程）。側壁奥半はこの上に、側壁を1段ないし2段積み、奥側の天井が高くなるように配慮されている（第3工程）。天井石は、その重なりから判断して、洋門側から架構したものであろう（第4工程）。

現在、奥壁の石材一つが引き倒され、裏側が掘削されている。この部分を見ると、地山の掘り方内に奥壁を据え、黒褐色土と赤褐色土の互層により固めていることが観察される。江戸時代に既に開口していたため、出土遺物については、一切不明である。

4. 考 察

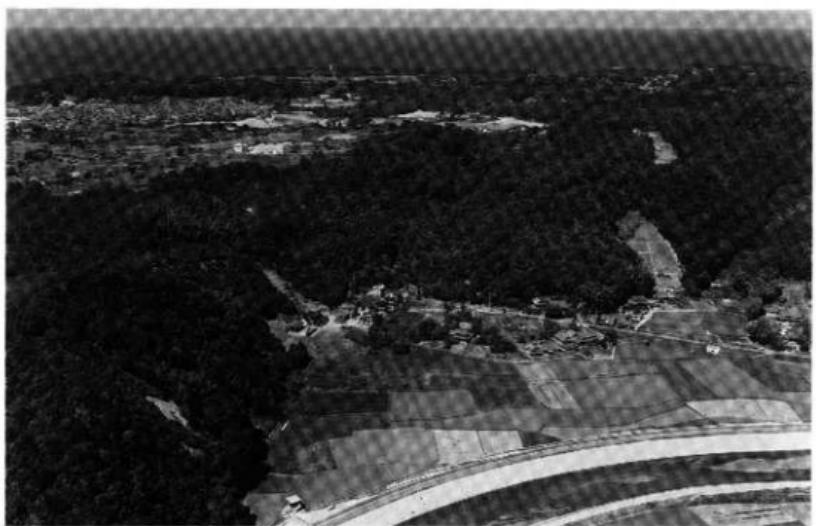
片山古墳の時期について検討したい。この古墳は、出土遺物により時期を決定することはできないため、墳丘と石室から時期を推定したい。まず、墳丘は、丘陵斜面に立地する方墳であり、石室に「切石」を使用していることからも、いわゆる終末期の方墳であろう。本墳のような外護列石を伴う終末期の方墳は、島根県益田市鶴ノ鼻51号墳、鳥取県米子市石州府6号墳、岡山県倉敷市二子14号墳、同県北房町定北古墳、同町大谷1号墳など、中国地方でも各地に認められる。これらは、7世紀代のものであり、片山古墳も同様の7世紀代の終末期方墳と判断される。

一方、石室の「切石」石材の敲打只技法は、畿内の花崗岩切石の横穴式石室に用いられた技術である。こうした石室は、岩屋山式などの7世紀中葉以降の古墳に認められる。中国地方でも、切石が用いられた石室は、定北古墳、大谷1号墳、広島県新市町大佐山白塚古墳、本郷町御年代古墳など、7世紀中葉以降に盛行するようである。片山古墳の石材は花崗岩ではないが、敲打只技法による「切石」であり、新しい石工技術の導入と周辺地域の切石石室との関連を推定させる。従って、片山古墳の築造時期は、7世紀でも中頃に近い時期と考えたい。以上の検討から、片山古墳は下府廃寺建立に先立つこの地の首長墓であると判断される。片山古墳の時期と被葬者像の追及は、終末期古墳から白鳳寺院への推移の過程と下府廃寺出現の歴史的背景を考える上でも重要である。

註

- (1) W. Gowland, *The Dolmens of Japan and their Builders : Transactions and Proceedings of the Japan Society*, No. 3 vol. IV, 1899, London
- W・ゴーランド・稻本忠雄訳『日本古墳文化論』創元社 1981年
- (2) 和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』 1983年
- (3) 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年

図 版

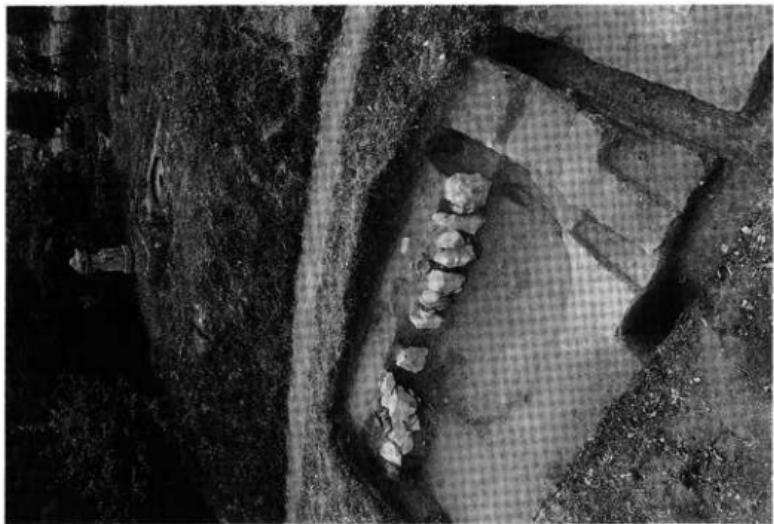


図版1 下府庵寺跡近影



図版2 作業風景

图版 4 塔跡東緣中央(左段階)

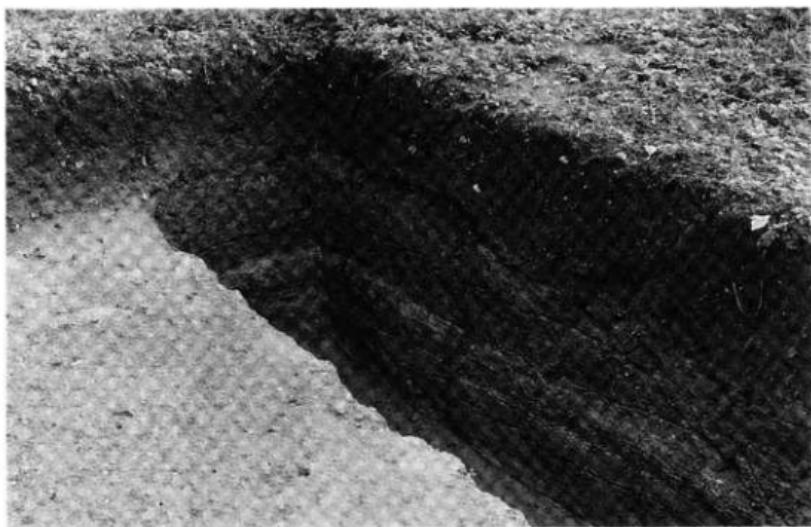


图版 3 塔跡北西隅(中央環石抜取り穴)





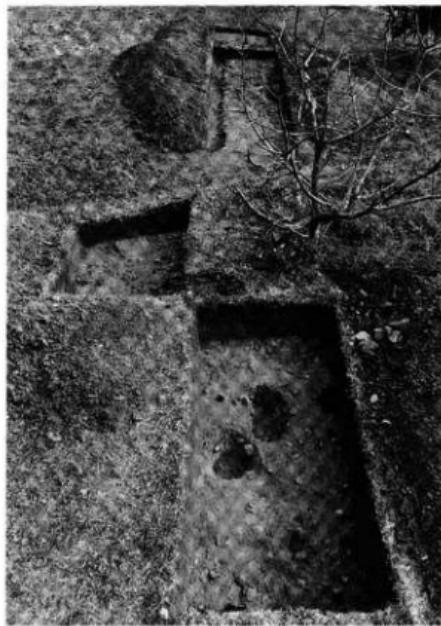
図版5 金堂跡北東隅



図版6 金堂跡版榮土(第9-3調査区南壁)



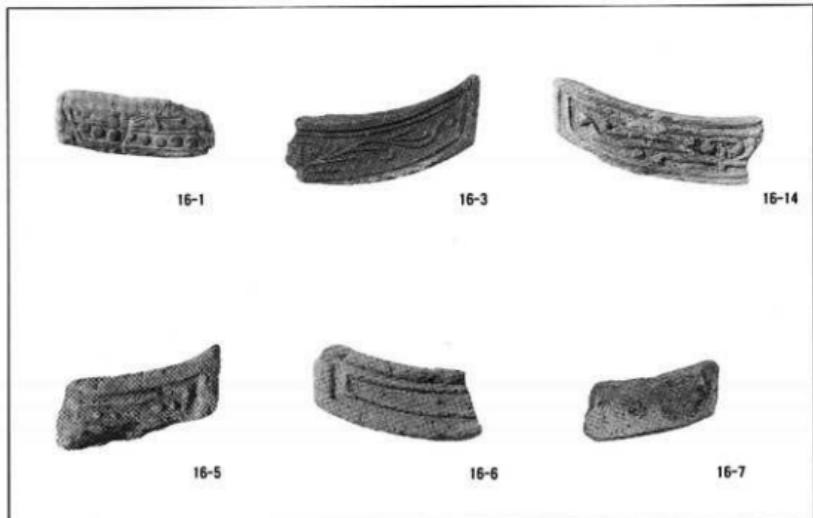
图版 7 段状遗构



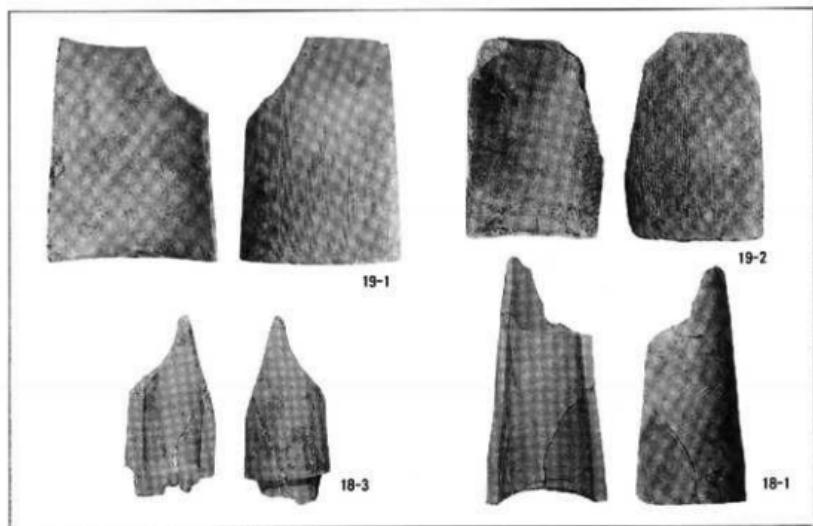
图版 8 柱穴群



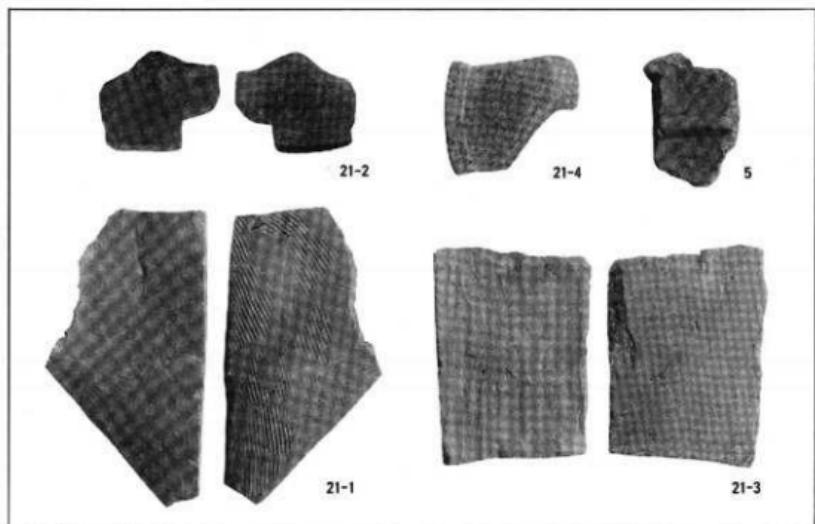
図版 9 軒丸瓦



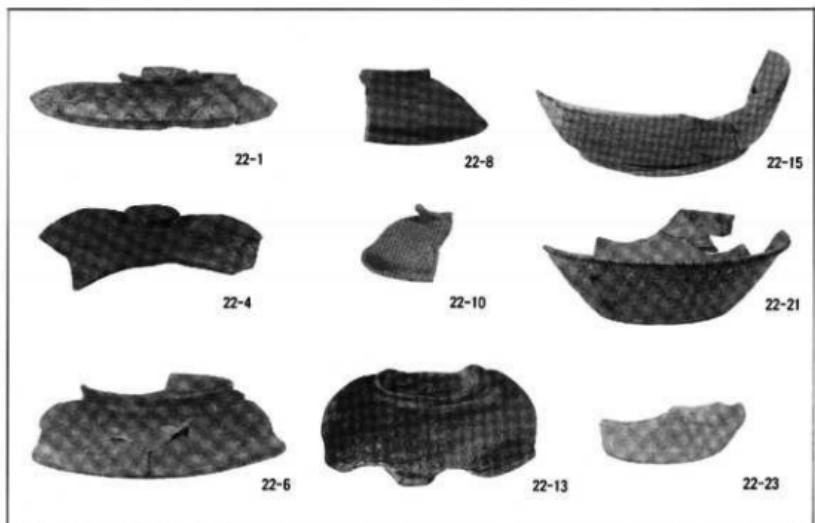
图版10 軒平瓦



图版11 平瓦·丸瓦



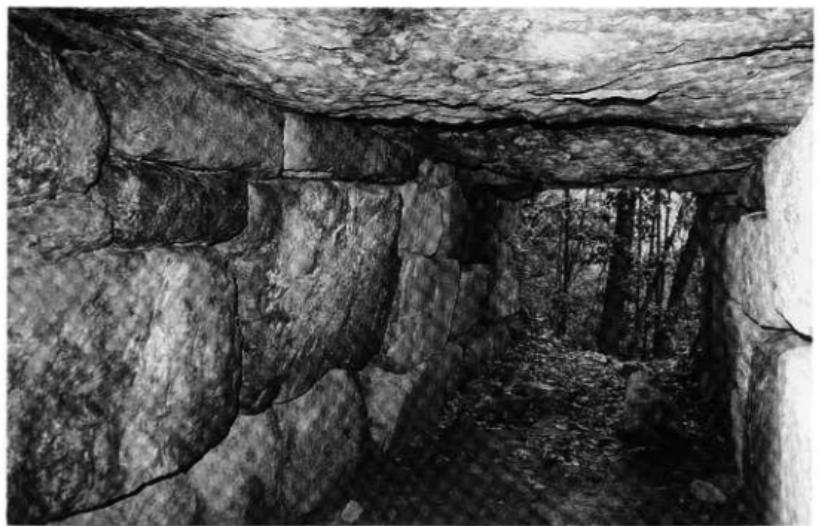
図版12 瓦道具



図版13 土器



図版14 片山古墳石室(奥壁を望む)



図版15 片山古墳石室(奥門を望む)